

Morfonicaは俺を巻き込
むな

ねこちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平穏で普通の生活を送りたい堂崎柊は高校に入つてからも散々なことばっかりで
普通を諦めていた。おかげで音楽にかなりの能力のついた柊は今回も月ノ森女子学園
に編入させられてしまう。

そんな彼を彼女達が見逃す訳もなく……!?

これは、とある家族と変わりたい少女達の物語である。

そして複雑な環境にいる少年が普通という幸せを求めるお話。

目 次

少年が変われるまで	普通じやない日常
俺が女子校に行くことになった訳	そう遠くない未来
1	幕間
ノーブルローズ：柊の過去	むかしのおともだち
桐ヶ谷透子は俺を巻き込むな	——
二葉つくしを俺は巻き込む	——
表と裏の日常にメタモルフォーゼ	——
第1章 出会い	——
44	——
たまには本気の青春を	——
八潮瑠唯は俺の協力者	——
広町七深を俺は救う	——
85	普通じやない日常
73	そう遠くない未来
58	幕間
30	むかしのおともだち
21	——
13	——

少年が変われるまで 俺が女子校に行くことになつた訳

月ノ森女子学園。100年以上続く名門校。その名前を聞いてきつと普通の人は清く正しいお嬢様学校、と思うだろう。周りのイメージとか今はどうでもいい。神聖な薔薇の咲く学園と思つたらまためちゃくちゃバンドに巻き込まれました！美しいお嬢様方とキヤツキヤウフフ？しかし！それは違う！ただの憂鬱でだるくて……それからそれから…………つまりだ。そういう場所なのである。理由は二つ。

一つは親に無理やり一年生から入れられた事。俺はもう高3だ。なのに、なのにだ。何浪だよいい加減にしろっ！

そしてもう一つは、俺以外が女子であるという事。それもまた俺とは次元の違う女子ばかり。

俺には空氣として生きるしか道がないみたいだ。



都内に二つもない立派な豪邸があつた。とても広いリビングがあり、二人の男がそこにはいた。

「終、お前月ノ森に行け。新入生としてな」

突如、家でくつろいでいた俺に対しても親父が発した言葉。一瞬、耳を疑つたが親父のウザいドヤ顔でいつもの事かと俺は耳が正常な事を安心する。

「は？月ノ森？それって女子校だつたよな。しかもいいとこの」

ちなみに言うと俺は男である。男の娘とかそういうのじやなくバリバリの男の子。巻き込まれることに関してはプロなので別に今更驚かないが。

「そうそう。お前もいい加減可愛い女の子の彼女を作るべきだと、偉大なる父は思つたわけよお～。あそこつてめちゃくちゃかわいい～娘、多いらしいしな！」

下心満載の工口親父は今回も権力と息子の俺を最大限、無意味に利用して遊ぼうとしている。その権力とは弦巻……。その家系である俺らは、今日も日本は平和ですみたいな力の使い方をしている。とても無駄である。迷惑なのでやめて欲しい。

「いやいや俺、男。あそこ、女子学園。イコール、無理。OK？」

親父の狂った発言に俺は簡単にまとめて教えてあげた。……とは言つても何言つたって無駄なんだろうけど。

「知つてるか……頑張つて手術に耐えたら……人間は性別の壁を越えられるらしいぞ……」

表情を真剣に変えて実の息子に言うことがこれか。マジで誰か病院連れてつた方がいいんじゃないか。

「もう少しまともで現実的で痛みがない方向で頼む」

そう言いつつもノリ気な自分にも少し引いてはいるが、こうしないとこのアホは治らないことを知つている。と言うより自分が女子高に入るなんて二度目だ。もちろん原因はこの変態。

「いやあ～良かつたよ！お前が引き受けてくれて。最悪、無理やり女装させて行かせようと思つたわ！俺に似て顔は良いからな！お前は。まあ俺が女装して行つたらすぐバレて、何故かピカピカ光つてサイレンの鳴る車来て、ビックリしたけどな！ガハハハツ!!!」

もうなんなのコイツ。そろそろ一人暮らししようかな。いや割と真剣に。

こんなだから、妻と娘に別居されるんだよ。ウチには立派な別荘があり、そこに別

居中。

正直、今の俺の気持ちとしてはざまあとか言えない。

本当は俺も母に連れて行つたもらうはずだつたのだが、父が寂しくて土下座して何とか俺だけは父と生活することになつた。何でだよ。諦めるなよ母。だから俺は名字だけでも母方の堂崎にした。弦巻です！なんで名乗つたら、その瞬間に俺の人生は終わるだろう。社会的に。

「ていうか1年前もとあるアイドルグループを売れつ子にしろとか似たようなことやらせたし、それに幼馴染のバンドにも手を貸さなきやいけなくなつたし!!!その前もこころのせいで女子高に1年間いさせられた！」

こころとは俺の妹の事なのだが……どうにも俺はアイツに勝てない。半分いじめだよねこれ。この娘はこの父の遺伝を9割は引き継いでいるだろう。俺はその逆だけど。「ということで手続きとか全部してあるし、ぶつちやけ柊が何言おうと関係ないのでレツツゴー！」

「話聞けよ!!!」

翌日、柊の部屋に世界に一つしかない女子高の男子制服とその他学校生活に必要な物一式が届いたとさ。届いてしまつた。返したい。

届いた生徒証には名前が書かれていた。堂崎柊。

どうざきしう。

『数日後……』

うふふ！私、堂崎柊子！17歳！月ノ森女子学園のイケイケ☆の女子高生！今日から
楽しくみんなお友達に――――――――――――――――――――――――――――――

なる訳ねえ―――だろうがよおおおお!!!

いいか。俺が今まで女子と仲良くできてたつて偶々運が良かつただけで、こんな場違
いな所に来たら表面上は仲良くしてくれても、裏で「チツ……んあんなのと同じクラス
なんだし、キモつ……」って言われるに違いない。

いつも通り俺はやれやれ系でクールに乗り切ればそれでいい。

目の前の校舎と周りの女子生徒からの不審な目。ヒソヒソと噂話さえも聞こえる。

もしかしなくとも俺つて浮いてるのでは？
(ああやだもう帰ろうかな……弦巻という裕福層にいてこんなにも不幸なのつて俺だけ
だろ……)

と考え事をしながら歩いていると人にぶつかつた。

「いたつ！」

派手な金髪が目立つ少女。ギャルというやつだろうか。それとも今井リサのように見た目ギャル的な？しかし彼女も普通とは程遠いオーラがある。才能もきっと豊富で人望もありそうだ。

え？てかここ金髪アリなの？俺のわざわざ黒に染めてきちゃつたんだけど。

「つと、ごめん！考え方してて……怪我はないかな？」

必死に帰りたいという感情を隠しつつ、あくまで紳士的に対応で手を差し出す。すると、やはり紺色のブレザーの俺が珍しいのか俺の全身を何度も見回す。

「あの…その制服つて月ノ森っぽいけどもしかして噂の男子生徒君？」

「ななななな、何で俺が月ノ森男子学生だとバレた!?」

(あーわかる？俺ってほら見た目からして月ノ森じやん？ほらそういうこと)

「なんか言つてることと表情が合つてないんだけど……」

苦笑いでそう言いつつ、ギャル？ちゃんは俺の手を取り立ち上がる。その時フワつていい匂いがする。やつとここで俺は女子校もアリだなと希望が湧いてきた。

この時点で前回の花咲川女子学園とは大違ひだ。あそこではいきなりコスプレした変態扱いされた。本当は親父（この世の悪の全ての元凶）が話を通していなかつただけ

なのだが、今日はそういう事態にはならなそうだ。命拾いしたな親父。
いや息子を女子校に入れるつて学習するなよ。お見合い勝手に組まれる方が100倍マシだぞ。

「こんなところにいるからあたしの知り合いかと思った」

ニコッと笑顔で喋る彼女だが、そんなに有名な人なのだろうか。それでもないとただのイタい人だ。

「知らないよ。ぶつかってごめんね」

(無事みたいだし、さつさとかえ……職員室にでも行こうかな)

俺も彼女の様にニコッと笑い返し、校門へ向かつた。

「そっち校舎じやないよー！」

なんか俺の制服だけでバレるつてまさか彼女は服に関して鋭いのかもしねれない。

「じゃ、行こつか。あたし桐ヶ谷透子！よろしく！」

透子という彼女に手を取られついていく。この時点では彼女がリア充だと、コミュ力お化けとかそういう陽気なキャラクターだということがわかる。ああ、恥ずかしいからやめてくれ。



俺にとつて慣れない校舎を少しずつ紹介しながら桐ヶ谷透子はまるで自分の家のようになつてくれる。とてもわかりやすくテンポがいい。それに先程から通り過ぎる女子学生が皆、挨拶をしそれを返していくという事が続いている。俺はそれに軽く会釈しながら、前を軽い足で歩いていく彼女を追う。

成る程、彼女が人気者な理由が少し分かつた気がする。

よし、大体の建物の構造が掴めた。そして30分も経たないうちに目的地の職員室に。ここで彼女とはお別れすることに。

「ありがとうございます。桐ヶ谷さん。お陰で助かっただよ」

「いいつていいつて。また後でね、しゅう」

桐ヶ谷さんは自分の教室に向かつて行つた。

(あれ……俺、名前名乗つたつけ……)

疑問がひとつ浮かんだが彼女のインパクトが強くて、まあ重要な事ではないだろうと

俺は疑問を忘れ、俺は職員室の扉を開く。

「ここにちは、貴方が弦巻さんの被害者の……堂崎君ね。ご愁傷様」

あの親父が無理言つてこうなつてはいるが、それでも自分に気を使つてゐる教師達の目に、俺は少し苦笑いになつてしまふが、早歩きでB組の担任の先生の所に挨拶をする。

互いに挨拶を済ませ、ついに禁断とも言われる女子校の教室の扉が開かれる時。思わず俺は唾を飲み込んでしまう。

「緊張しますか。新たな環境で新しい物事を始めるのはとても良い事ですが、上手くいかないこともあります」

その言葉に自分を快く受け入れてくれるのは全員じゃないということを思い出す。やつぱり慣れないこの瞬間に、担任の言葉ものしかかり、顔が強張つてしまう。

「ですがそれでも前に進もうとすることはとても、素晴らしいことだと思います」

そして俺は扉を開いた。いや、正確には開いたの先生なのだが。

軽く身嗜みを整え、重い足を動かす。教室に入ると自分だけ浮いていることに気配だけで気付く。

10 僕が女子校に行くことになった訳

(あー、当たり前といえばそうだけど女の子しかいない……)

ある程度進むとクラス全体が見渡せる。なんでかざわざわと女子生徒が話始める。(うわ顔面キモすぎワロタ)と思われているのか!?と一気に不安になる。

1人だけ異彩を放っている少女は先ほどまで一緒にいた、桐ヶ谷さん。なんとなく言いたい事が分かる。

(同じクラスだねー!)

とでも思つてているのだろうか。笑顔で軽く手を振つている。気楽でいいよな。

「堂崎柊です。皆さんには編入からして迷惑をかけてしまつているかもせんが、何卒よろしくお願ひ致します」

ペコリと頭を下げる。

シーナーーン。場が静まる。

(…………あれっ?)

「あ、あのっ! 堂崎くんって、彼女いるんですか!?」

「堂崎君の好きな異性のタイプは!?」

「1人だけ男子の編入って、天才ですか!? お金持ちですか!? 変態ですか!?!? もう帰りたい。桐ヶ谷さんがニヤニヤしてるのがムカつく。可愛いけど。」



「あーやつてらんねえ！」

俺はさつき一限目をさつさと済まし、桐ヶ谷さんに教えてもらった地形を把握し、すぐに屋上へと足を運んだ。サボリともいう。

少し身体を休めていると、足音が聞こえる。なんだ……？

「……ああ、桐ヶ谷さん。どうしたのこんな所で」

「そつちこそ。様子を見に来たんだよ。……随分さつきと態度が違うね」

威圧的なものではなく、ただ単純に俺のおふざけモードが切れてるってだけだろう。

物珍しげに見ている桐ヶ谷さん。沈黙が続き、俺は声をかけた。

「なんの用？もう寝たいんだけど」

そう言う俺に苦笑いしながら口を開いた。

なんだか嫌な予感がする。こういう勘だけは異常に当たる。

「初めて会つて、少し経つてからあなたのこと調べたよ。R o s e l i a のしゅうさん？」

スマホ片手にからかうような桐ヶ谷さんの目は、少し怖かつた。俺の中で新しい風がまた吹き始めた予感がした。

ノーブルローズ・柊の過去

『二年前』

普通の中の普通。外見、能力、性格。全てにおいて平均という凡才。堂崎柊には過ぎたるものが二つあると言う。もちろん親父ではない。

一つは湊友希那と今井リサという可愛く、そして優秀な幼馴染。

そしてもう一つはこの穏やかで楽しく過ごせる仲間達。R o s e l i a

友希那やリサの力になりたいと付き合いはじめたガールズバンドというものは、側から見てつまらない人生を送っていた柊にとつてやりがいのある、そしてこんなにも心を豊かにする凄いものなのだと思っていた。

真剣な眼差しで歌う友希那。楽しそうにやるリサ。練習じやなく本番のようにやる紗夜。激しく演奏するあこ。一生懸命で綺麗な演奏する燐子。
(よしつ！ いける!!)

彼女達の演奏を聞いて、俺はガールズバンドパーティ。通称ガルパ。女子の高校生達のバンドを集めて演奏の質を披露し合う大会。その大会に通用する事を確信する。

R o s e l i a は結成してそんなに経っているわけではないが、質の高い練習を積み重ね、今この演奏を聴いているファンの俺が羨覨目に見なくてもそう思えるのだから仕方ない。

「いい感じだなーみんな、そろそろ休憩にしよう！」

演奏終わり、俺の一聲でみんなは各自休憩に入つた。そこで俺は用意していた飲み物とタオルを全員に渡す。

「調子はどう？」

「ええ……まだまだ上へは目指せるけれど、最初の頃に比べればかなり上達したと思うわ」

そう自信に満ちた顔で言う湊友希那。友希那がここまで言うつてことはどこに出ても恥ずかしくない。学生にしてはレベルが違う。前奏や歌い始めて圧倒できるかもしれない。

「やっぱり柊さんが来てからバンドがまた楽しくなったよね！お兄ちゃんって呼んでいい？」

テンション上がりまくりなこの子は宇田川あこちゃん。あんなに演奏したというのにこの疲れ知らずめ。元々俺はあこちゃんと燐子ちゃんとはネトゲのフレンドというやつだ。しかもリアルで会つたのは偶然に。

「それは俺が（社会的に）ヤバイし、（萌え）死ぬからやめようね！」
「えええーーー！」

そんな残念そうに叫んでも無駄だ。というか呼ばせたいのは山々だけどそんなことをしたらRose1iaだけでなく、お姉さんからも怒られてしまう。まだ会つたことはないが。

「ふふつ…」

その光景を見ながら微笑ましく笑つているのは白金燐子ちゃん。この2人とは趣味が合つてているのですぐに仲良くなれた。

「そういえば燐子ちゃん、俺の想像以上にピアノが上手かつたね。勿論素人感想だけど」
あははと笑いながら感想を伝えてみる。前々から練習をしていたが、ちゃんと感想を伝えるのを忘れていた。何様だよつてなるけどそのために自分がいるんだ、ちゃんと感想欲しいと釘を刺させていたので要望通り職務を果たす。

忘れていた辺り、堂崎柊の本来の性格の適当さが出ているが。

「ほ、本当ですか！……柊さんにそう言つて貰えると……嬉しいです」

親友が喋つているというのに、ねえーあこはー？と少しやかましい。はいはい勿論上手いですよ。実際生演奏の聞き比べなんて経験が無いので分からないうが、曲として出来上がつてるなら上手いのではないだろうか。一つがズレているならかなり不協和音になりかねない。多分。

「だから自信を持つて、燐子ちゃん。ゲームだつて俺より上手いんだからさ」

「ありがとうございます」

Roseliaはプロ並みの演奏をしていることから、たまに燐子ちゃんは自信を無くすことがある。俺の人を褒めるセンスの無さをここで活かす時が来る。

「堂崎さん。少しいいかしら」

ネトゲつ子どもの相手をしていたら、横から声をかけられた。

「冰川さん、どうしたの？」

氷川紗夜さん。Roseliaの中で唯一面識がなく、真面目すぎるその性格から自

分とは住む世界が違う。とまでは言わないが俺みたいな熱くない男に合わない程、ギターに熱血を注ぐ少女だつた。

「どうしたの？じやないでしょ！私が何回もギターの練習に誘つているじやない！なのに今日、イベントクエストあるからباسじやないわよ！」

そう。彼女を知らない人は勘違いしないで欲しいのだが、本当はもつと冷静で落ち着いた綺麗な人なのだ。少なくとも俺が初めて出会つた時に抱いた印象はそれだ。

彼女がしているのは数日前の話だろう。冰川さん曰く、俺にはギターの才能があるとかなんとか……。いやいや昔カツコつけてギター買つたけどさ。2日でやめた俺に何ができるつて言うんだ。むしろその話をしてどこに才能を感じたんだ。

「い、いやほらさ。その日はたまたま頼れる仲間あこと_{構子}がピンチでさ、俺が助けクエストに行かなきやいけなかつたんだよ。ごめんつて」

冰川さんは俺がRoseliaに来る時に、俺をギターで試した。今まで遊び感覚のバンドばかりでプロ気質の冰川さんには合わなかつたらしい。そこで俺は成る程、こりや友希那と合うわけだと思つて気楽でいたら目の前で弾けと。確かに、実力のない人に指導はされたくないだろうけど俺は

(終わつた…)

筆記だけで合格出来る試験にいきなり本番当日、実技もありますと言われた気分だつた。公開処刑会場はここですか？ほら友希那とリサは苦笑いだけどあこちやんと燐子ちゃんめつちや期待してるやん。目キラツキラやん。

そうして俺はボロツボロの演奏を披露した。やめて、気を使わないでくれごめんなさい。練習してなかつたんです。テキトーに弾いてオーディションに合格するなんてそんな人いるわけないだろ。いないつて。

(こりや不合格だな……)

その時、偶々冰川さんの耳は調子悪かつたのだろう。下手だけど才能はあると言う、小学生が落ち込んでる時にかける言葉みたいなこと言われた。ダイヤの原石とか磨けば光るとか……やりたくないとは一言も言えなかつた。

それから冰川さんは時間がある時に携帯によくメッセージをくれるようになつた。ごめん今日は左足擦り剥いたから出来ないとか返していたが、最近流石にバレた。本当はそれで騙されちゃう冰川さんが可愛かつたのだが。

「紗夜～柊の事ナンパしてるの～？」

「い、今井さん！違います！私は堂崎さんに、ギターを知つて欲しくて！」

氷川さんがあまりにも俺にしつこいのでリサがよくイジりに来る。助かりはするが、フォローするのは俺なんだぞ。

「でもダメだよ！ 栄はアタシのモノだからね！」

そう言つてワインクをしてくるリサ。は？ つて言いたくなるが俺含め、お姉さん気質の彼女にそんなこと言われてしまうと、照れることしができない。悲しい男の運命。

「ちよつ……堂崎さん！」

俺関係無いし。というように俺は上を見る。ていうかみんな休んで？

（ああー、今日の夕飯どうしよう。リサにでも作つてもらおうかなー）

ボーッとしてるとやんやんやんやんと音楽娘っこが騒いでいるが耳を通り過ぎていく。ふと友希那を見ると落ち着いていた。もう慣れたと思つているのか余裕だつた。友希那を見ていると、彼女に誘われた時を思い出す。

友希那やリサがやれ音楽やれバンドとゴリ押ししなければ、俺は引きこもつてゲームや読書をする人間だつたのだ。

知識はないし、腕があるわけでもない。なんなら才能すらない凡才だつた。

それでも Rosselia はこんな俺を、外見は一見不良で凡才な俺を受け入れてくれた。幼馴染を遠くから見ていているだけの自分を連れてきてくれて居場所をくれたのだ。

「ありがとな、みんな」
ボソつて呟いて今日という日常が流れしていく。
この幸せがずっと続きますように。

第1章 出会い

桐ヶ谷透子は俺を巻き込むな

広い校舎に比例して立派で豪華とも呼べる屋上には、温い風が吹いていた。

堂崎柊の中でも生ぬるい感情が廻っていた。懐かしい単語が頭の中から離れて消え
ないのだ。^{幼馴染ではない。} 目の前にいる桐ヶ谷透子が彼女^{リサ}に重なる。ニヤニヤ笑う顔が似ているのだ。
でも違う。

思わず身構えてしまっている自分がいた、身体でも心でも……。

桐ヶ谷さんがスマホで見せてくれたのは、二年前に撮った写真。SNSで拡散された
その画像に映っているのは事件前の俺とRosalia。

いつもの練習中、偶然リサが撮った写真の中に映り込んでいる俺。

「一体そんな物掘り返して何が目的だ？」

その過去は俺の夢^{Rosalia}と思い出で忘れるべきものなんだ。誰にだつて触れられたくない
過去はある。向かうべき夢と楽しかった思い出さえあればそれでいい。

大切な人を守れるならそれは誇りだ。

「しゅうは二面性の人なんだね。君はきっと流行るよ」

俺の冷めた声にも全く意を介さず、会話として成立していない。

大体初日からこんな調子じや桐ヶ谷さんの話が終わつてもどうせ空気や背景にはな
れない。経験上、絶対誰か巻き込んでくる。間違いないね

それに流行るつてなんだ。タピオカか何か？

「はあ……」

桐ヶ谷透子。会話から何から彼女にペースを握られていて気が抜けてしまう。どう
やら完全な悪意で無いことを燐子ちゃんがしていたように顔色を伺つて分かる。

しかも距離の詰め方が異常に早い。もしくは俺の名字を知らないか。このイマドキ
女子め。

「ねえしゅう。少し前からさ、ガールズバンドつて流行つてんじやん？」

「ソウダネ」

「それでこの前ライブハウス行つたらさ、倉田と二葉に会つて3人で見たんだ！ちょ一
やばかつた！」

「ヨカツタネ、ソレハタノシソウダ」

「それでバンド組むつてなつたらあたし絶対ギターやりたい！」

「ウンウン、ヤツパリタマゴハオイシイヨネ」

「ちよつと聞いてるー？」

つまりこの桐ヶ谷透子、ガールズバンドにハマつてしまつたらしい。影響されてギター始めたいだなんてまるでイタい男子中学生みたいだが、それを微塵も感じさせないとは桐ヶ谷さんのギャル的オーラが輝いている。倉田と二葉つて誰だよ。少なくともB組でない事は確かだ。さつき全員覚えた。

確かにガールズバンドは俺が興味を持ち始めた頃には既に、Glitter*Greenを代表に有名なガールズバンドがいた。

ほんどの知り合いが熱中していたし、やつたことないけどやりたいって人なんて話は聞き飽きたぐらいだ。

「それでー、あのRoseliaと一緒にいるぐらいだからめちゃギター上手いとか！」

とか！じゃないんだよ。馬鹿め、俺に何を期待しているんだ。何なら今からイケイケ逝け逝け曲弾いてやろうか。喜べよギターソロだぞ？

「何を期待しているのかは知らないがこれだけは言つとく。いるぐらいじゃなくて、いたぐらいだ」

勘違いしないで欲しい。縛らないで欲しい。俺は一発ネタがウケたからってそれしか出来ない芸人じやない。俺は Roseliaじやない。

「そつか……今は違うんだ」

「そういうこと。わかつたらさつさと

「じゃああたし達のバンドに入れるじやん！」

「は？いやそうじやなくて」

「じゃあ放課後ホームルームが終わつたら校門ね！その後虹も飲ませてあげるよー！
バーイ！」

勝手に話をして勝手に帰つたよアイツ。でもまだ『へつへつへ……これをバラされたくなかつたら金だしな』とか言われなくてよかつた。

桐ヶ谷さん、本当に俺もメンバーにするつもりなのだろうか。俺もしかしてまたガールズバンドに巻き込まれてる？何これ呪い？
(……こつて裏門とかないかな)

もうサボる気すら無くなり、俺はトボトボ下に降りて行つた。

女子という女子の間を通つていく。まだ好意的な人が多いので助かるがあんまり見ないで欲しい。だつて俺はちょっと胸がなくてツイてるだけの普通の人だから。

「あーーーー！いたーーーー！」

「はん？」

突然廊下中に響き渡る声。何事かと振り返るとかなり小柄で小さめの女子生徒が俺の方に近づいてきた。

「もう！ずっと探してたんだから！あなたが堂崎さんね！」

俺のそばまで来たその子は見上げながら自信満々に喋る。身長差が20は平氣であるので自然とこうなつてしまふ。てか誰すか……ちよつち面倒つすオイラ。勉強で忙しいガリ勉なんだからさ、邪魔しないで欲しい。

「なんですか？ちよつとウォーキング中なので、手短かにお願いします」
「ウォーキング！？そんなのいつでも出来るじゃない！……それより、この二葉つくしが今

日からあなたの面倒をみます！」

なんで？そんな付き添い人みたいな人いられたらちよつと困るよ。俺のパステルライフ的な意味で。屋上で俺の愛読漫画、Pastel*Pallettesの漫画が読めないよ。隣に女の子がいたら。

「その件につきましては二葉さんに迷惑だと、俺は推測致します。故に二葉さんはご自分の有効かつ、有意義な時間を過ごされてはいかがでしょう？」

もちろん俺もそうするから。若い時間をこんなのに使うなんて勿体無いYO！

「ふふふ、それについては大丈夫よ！・それも学級委員長の仕事だから！」

ドヤア……つと可愛らしく宣言する二葉さん。駄目だ、こういう人に何を言つても無駄かな。現に引く気もないし、確定事項みたいだ。

あなたに意見聞いたけどまあ私はこれやるけどね!!学級委員長、そりやあんまりつすよ。こつちも被害者なんだから優しくしてほしい。要は大目に見て見逃してほしい。

「分かりました……お願いします二葉さん……」

「これは私にとつても一つの挑戦よ！互いに頑張っていきましょう！」

（胸を張つて手を差し出す二葉さんと握手を交わす。
胸を張つて手を差し出す二葉さんと握手を交わす。
胸を張つて手を差し出す二葉さんと握手を交わす。
胸を張つて手を差し出す二葉さんと握手を交わす。
胸を張つて手を差し出す二葉さんと握手を交わす。）

「さあーつて！ それじゃ私はA組に戻るから何かあつたらいつでも頼つてね！」

「そつちC組だぞ」

「ああーーっ!!」

この人、意外とポンコツってやつかもしれない。頑張り屋だとは思うけど……。

俺が教室に戻つてから視線が痛い。物理的ダメージを食らつてはいるわけではないが……チラツと横を見ると自然の主が分かる。

(確か……広町だっけ。広町七深)

見るからにおつとりしてそうな彼女。いや見過ぎでしょ。感動の再会か朝痴漢された人を見る目だ。どちらでもないのだけれど。

「じい————」

ついに声に出しちゃつたよ。隠す気ないつて事なのだろうか。また変な人に絡まってしまったか……。

(気づかないふりをしよう……。声をかけたら絶対に面倒だ)

「むう……」

少しいじけてしまつたか。それでいい、俺に関わるな。それがベストですよ広町さ

ん。君のせいで授業が頭に入らない。まあ元々聞いてないけど。

特にそれから地味なアクションするだけで話しかけたりはしてこなかつた。時間だけが過ぎていき、やがてホームルームとなつた。俺から話しかけるということか。俺のアクションを待つてたら卒業しちゃうけどそれでもいいかな。

たまに視線に耐えられなくなつた時は隠れてスマホいじつてたりしていた。……おい駅前の虹色のスムージー絶対流行らないというコメントを見たんだがもしかして『虹』ってこれじやあないよな？

キーンカーンカーンコーン

チヤイムが鳴り学生達は騒がしくなる。俺の席にも1人の少女が笑顔で近づいてきた。

「おーいシユークリーム！虹行こうぜ！虹！」

そんな海行こうぜ！海！みたいに言われても行きたいとは思わない。女子高生は1人で買い物出来んのか。俺を巻き込むな。

「シユーカリームつて誰だよ！てかお前！虹つてこれじやないよな!?」

俺は調べていたサイトを桐ヶ谷さんに押すように見せつける。もしこれが飲み物（仮）なら今すぐ帰りたいのだが。

「おー！調べておいてくれるとは気が利くじやーん？」

「桐ヶ谷さん、俺ちょっと腹が——」

「有無を言わさず腕を取られる。もううるせえからはよ来いってことか。

「細かいことは気にすんなよ！あと言わなかつたつけ？あたしのことは透子でいいって！」

桐ヶ谷さん……透子に連れて行かれながら見る教室には目を少し開いて驚いた顔をしている広町さんだつた。とても可愛かつたが2秒も見れなかつた。

楽しそうに引っ張る透子を見てるとなんでも許してしまう気持ちになるが、これだけは言わせてくれ。

俺を巻き込むな!!!

二葉つくしを俺は巻き込む

「感動した！是非俺の友達になつて欲しい！何ならこれからお喋りしないか！！」

「え、えええええ！」

倉田ましろは驚いていた。何故なら待ち合わせで友達を待つていただけなのに、初対面の男の子にいきなりナンパされていたのだから。興奮気味になる男の子を見て、地味な私が？もしかして人違いかも？なんて事を思いつくが、金色の綺麗なその瞳が貫くのは何者でもない私自身である事を肯定していた……。



「おい透子、バンドをやるとして大体は決まつてるんだろうな」

「今から決めるんだって、もうこのせつかち」

堂崎柊はこの愉快な誘拐犯、桐ヶ谷透子にまさに連行されている所だった。もうガールズバンドなんて関わらない。なんて昔の俺なら拒絶していたかもしれない。「はい？え、メンバーは？」

「しゅう入れて5人！」

入れるな。

「曲は？」

「まだない！」

「衣装とか……」

「ないけど多分あたしがやるかな～」

「何も決めてないのに俺を呼んだのか!?」

「こいつ…………度胸があるというか何も考えていないというか。正直、他の3人に賭ける
しかない。パートだけ決めてあるつて……原画やストーリーは決まってないけど声優
だけ先に決めたアニメか。

(……ん?)

後ろから付いて来てるの広町さんじゃないか。なんで声掛けないんだ?

「なあ、透子。広町さんがついてきているけど……」

「ん? ああ、だつて広町、うちらのベースだし」

ようやく腕を離し、やつと並走することが出来た。広町さんも隠れるわけでもなく、
俺達の方へ來た。

「やあ広町さん。さつきは挨拶出来なくてごめんね。ちょっとこの学校について分から
ない」とが多いからよろしくね」

「えーあたしの時と対応違くなーい?」

〔樂しい生き方〕
「と異議を申し立てる透子。うつさい、お前は俺の話聞かないだろう。それに透子に
ワタシのノリじやない素のままで喋るトリサと被つて仕方ない。

「…………」

すると広町さんは教室でしてたようにじいーと俺の顔を見続ける。ちょっと甘い匂
いが……。」

「な、何かな。何か顔についてる?」

「ううん。ただ堂崎くん、婚約者って聞いてたからどういう人なのかなーって」

「……は?」

「あーなんだそんなことか! 何かと思つてびっくり……」

「ええええええええええええええええええ!!!!」

その声は広すぎて持て余すだろう月ノ森でも、そこにいる全ての人間に聞こえたのでは
ないだろうか。そのぐらいの大声を出していただろう。

「もちろん、私も最初は冗談かと思つてたよ。でも今日、うちのアトリエに弦巻さんから
荷物が来てたんだ♪」

「ええーそれマジかよ！良かつたなーしゅういきなり春が来たぞ」

自分には全く関係ない面白い話が入ってきた！と満面の笑みで俺の脇腹を何度も肘を当てる。ウザすぎる。

「いやそんな話聞いてないよ！どうせ親父だし、無視しちゃつていいよ広町さん」

こんな俺と結婚確定とかかわいそう過ぎる。死刑宣告やないか。

今までも親父の言うことは意味わからないことばっかりだつたが、今回もまるで意図が分からぬ。

「でもね……もううちに堂崎くんの荷物、あるよ」

「そうだつた……どうせ大したもの入つてないし、捨てちやつていいよ」

「え、ダメだよ！捨てられないよ！それに……」

「それに？」

「婚約者つて事は、恋人つて事だよね！それつて凄く普通の青春っぽい！」

えー…。確かに俺も環境が変わり、普通を目指し始めた人間ではあるが婚約者とか愛のない恋愛が普通とは言い難いんじや……。

広町七深。彼女については全くと言つて情報が無い。あえて言えば同じクラスで少しづれてる所だろうか。俺の最初の印象はそれだ。でも広町さん、別に魅力がないと言ふ訳ではない。むしろ可愛いのではないだろうか……。

「いやいやいやいや！ いくら広町さんが可愛くともそれはまずいよ！」

その時、彼女は驚いてた。ただそれと同じぐらい嬉しそうであつた。

「え……もう一回言つて」

「えっと……まずいよ」

「そこじゃなくて」

「可愛いよ、広町さん」

「堂崎……いやしゅーくん……」

「何なの…………こいつら」

最早ギヤグの勢いであつた。彼女は俺を試しているのか!? 教室から今も！ 俺は経験の無さが仇となり、タジタジになるばかりだつた。

結局、俺が親父に電話したら、案の定、

「月ノ森の娘さんを持つ知り合いがいたから求婚しといた☆」

とそこで電話を切らせてもらつた。一緒に寝るわけではないけど、こんなのもともに

彼女のいなかつた俺には難易度高すぎないか!?

「…………話は済んだ？ ジャあさつさと行こ」

「おいちよつ」

電話切るや否や透子が不機嫌そうに足を進める。さつきまでイジつてきたというのにどうしたんだ。これが女心つてやつですか!?

「楽器見に行こう?・しゅーくん」

広ま……七深は（訂正された）新鮮な日常なのかもうノリノリ。助けてください。クラスマイト達の気持ちが分かりません。七深さんは誰にでもフランクなのはわかつた。この急展開は普通ではないが……。

俺は先に行つてしまつた透子を七深と追い始める。どうにか機嫌を取れればいいのだが……それでも虹は飲まないからな。



俺は……俺はついに理想に対峙したかもしね。あの平凡さ……まさに俺の理想であつた。

校舎を出て、校門へ着くと2人の少女が人を待つていた。

そこには二葉と知らない少女が喋りながら待ち合わせをしていた。だが俺は――。

「うおおおおっ!君!名前は!?」

「堂崎さん!?」

「え!? あ、倉田……ましろです」

(真白……ましろか……)

自信なさげに喋る倉田さん。イイツ!!!この学校にあるまじき自信のなさと謙虚。きつとこれから伸びるに違いない。

「感動した! 是非俺の友達になつて欲しい! 何ならこれからお喋りしないか!!!」

「え、ええええ!」

「ちよつと堂崎さん! なんであなたがここに!?」

「うるさいぞ田中。俺は今この子と話してんだから月ノ森生の自覚を持つて行動しろよ」

「なんで私が言われなきやならないのよ! あと私は田中じやなーい!」

「倉田ー、二葉ー、そいつちよつとまともじやないからほつとけって

「待つてよー!」

俺がいきなりダッショウしたので、二人とも置いてきてしまった。そこで俺は倉田さんが困惑しているのに気付いて、距離を置く。

「いきなりナンパなんて何考てるの!?」

「なあに、別に俺は倉田さんを口説こうとしてるわけじゃない。君みたいな友達が欲

しかつただけだ」

情熱アプローチしたせいで二葉さんが勘違いをしているかも知れない。というか絶対している。

「あんな友達のなり方があるか」!!

「えっと……友達ならいいよ」

「マジ!? こいつ何するかわかんないよ」

なんで透子はさつきから俺の評価を下げに来ているんだ。俺をぼっちにしたいのか。特にデリケートな部分なんだからやめろよ。

「許嫁はいるのに友達はないなんて……」

おい聞こえてるぞ。七深はもう俺の許嫁（仮）になりきっている。君の何がそうさせているのだ。満更でもない俺が一番ヤバいのかかもしれない。だが七深のためにもどうにかして話に決着をつけないと……

無事、友達一人とギャル一人と委員長一人と許嫁一人と仲良く寄り道しながら帰ることになりましたとき。どんなパーティだよ。



俺が来る前から、4人でバンドする事は決まっていたらしい。それで色々見たいんだと。ということで都内でもかなりの品数が揃う楽器店に来た。R o s e l i aやP a s t e l * P a l e t t e sのポスターも貼ってあつた。俺は詳しくないが倉田さんが好きだというポピパやA f t e r g l o wもあつた。……ついでにハロハピも。センターに妹がいるつてむず痒い。

みんなバラバラに動き、俺は一番近かつた二葉さんとドラム関係の商品を見ていた。「んでバンドするために楽器見たいのはわかる。それがなきや始まらないからな。それでなんで俺が必要なんだよ！」

「まあまあ、友達付き合いつてのも重要なんだよ堂崎さん」

何かあつたら私を頼つてね！というドヤ顔は今も健在な二葉つくし。あと俺が友達付き合いを大事にしなかつた前提なのやめてくれない？その結果がこれなんですけどね。

「二葉さんがバンドするなんて意外だけど」

「うつ……やっぱ似合わない？」

「いーや。俺は他人が似合わないと笑つても自分の気持ちを優先する。ありのままの俺が通用するのが俺の普通。よつて、二葉さんは好きな様にしなよ」

「成る程……うん！」

一見、俺の考えるこの普通は自分の考えを押し付ける独りよがりであり得ないと思うだろう。この自己中、と。

しかしそうではない、周りに自分が合わせる普通は自分を消す。今の教育の様に。一般的な普通は俺を消してしまう。

堂崎柊は普通を愛している人ではあるが普通の人ではない。自分を含め、普通という概念を打ち消す人間を共感し、また一つの普通を好む。個性を消すことのない普通を。俺は面倒くさいエゴであると自覚している。

楽器なり、人物なり、才能なり。全てにおいて自分を隠す事ない普通を目指しているのだ。

などと考えていると、向こうからそれぞれの楽器を持つたクラスメイト達が来る。

「おーいしゅう、このギタードラム思ふ？」

この服どう？と聞いている感覚なのかコイツは。黒をベースとしたデザインのギター。ベースとしているのにギター……。

「いんじやね」

「適当ともつと感想くれよー」

「そんなこと言われても楽器わからないし、人に頼んで後悔する事もあるし自分がピンと来たやつでいいんだよ」

「そつか、それもそうだね」

「それこそ適当なアドバイスだつたが、透子は戻つて行つた。次は七深だ。

「ねー、しゅー。ベースつてこのデザインでもおかしくないよね。普通だよね」

「普通だと思う。俺の中では」

「じゃあこれにする」

「え……」

七深は俺と透子の話を聞いていなかつたのか。一応俺はもう一度、念を押してみる。
「いいのか？ 後で違うのがよかつた一つになるかもしねないぞ」

「んー、しゅーが選んだならこれでいいかなつて」

七深だけ好感度高すぎないか……？まさか親父がなんか話したか……？いやいや、変な事ばかり言う親父ではあるが、プライバシーを侵害する様な人間ではないはずだ。
ベースの色に関しては黒で統一すると厨二感あつて俺は好きだ。

「七深がいいならそれでいい」

「うん！」

七深も俺の答えに満足したのか去つて行つた。残つたのは俺と二葉さんだけ。

「いつの間にかモテモテだね！なんだか君の方が頼られててちょっとびっくり」

「モテモテ……俺が？二人とも俺に気を使つてくれてるだけだつて」

そりや自分以外の人の性別が違うという事をその身に置き換えて考えてたら鳥肌が立つ事だろう。俺もたつた。もちろん鳥肌が。

そんな話を二葉さんとしていたら急に鳥肌が……の鳥肌は……間違いない。こ、この無駄にビシッと決まつた高いスースにあの外見は！？

そんなまさか！？いつでも俺のことを監視しているとでもいうのか！？

「おい柊！せつかく俺が広町さんの家で待つてんだからはよ来いやあああ！」

「親父……店では静かしてくれ……」

で、出た――！勝手に婚約決めるやつ――！そうだ、俺は七深の有望な将来のために、ここで話を無くなつたことにしなきやいけない！

「あ、あの……」

二葉さんがおどおどしているが関係ない！七深や透子が来る前にここでケリをつけ る！

「お、俺さ！ふた……つくしつて彼女いるから結婚は無理だ！！すまん！」

柊以外の二人の表情が固まつた。あ、あれ俺ヤバいこと言つた……。けどここは演技に付き合つてもらう！学級委員長の意地を見せる時だ！

俺は二葉さん……つくしに近寄り、そしてアイコンタクトを送る。

(頼む……助けてくれ)

(は、はあ!? どういうこと!?)

(今だけでもいいから演技してくれ！お前しかいないんだ！)
(し、仕方ない……今回だけだよ！)

この一瞬で状況を変えるには、二葉つくしの力がないと無理だ。ここまで持つてきてしまったのは気が動転した俺なのだが。

「そ、そうです！ 私、どうぞ……柊くんの彼女なんです！」

「そうそう、俺たちもう出会つてめちゃくちやラヴ的な？ 付け入る隙ない的な？ マジ的な？」

「なん……だと？」

顔芸をする親父。詳しくは隠キヤ過ぎる息子が入つたばかりの女子校で彼女作るとか隕石降るんじや……って顔だ。

「わ、私・柊くんの面倒みてるんです！ 指導してたら、自然と恋に……」

言いながら真っ赤になるつくし……恥ずかしいのは分かるが耐えてくれ……！

「な、ナニイ!? (性的な) 面倒みて、(性的な) 指導だつて!? わかった！ 今日の所はこ

の辺にしよう！しかし、柊！もう話は通してあるし荷物丸ごとないから広町さんの家に行けえ！そしてつくしちゃんと励めよ！じゃあなあ！！」

「台無しだよ。最後までうるさいし、もうめちゃくちゃだ。

「あの柊……くん？」

「あー……。ごめんつく……二葉さん」

「つくしでいいよ。私も柊くんって呼ぶし……大変なんだね」

「つくし……親父の前だけでいいから助けてくれ」

「う、うん」

（もう……私がいないと本当ダメな人……）

二葉つくしの中で堂崎柊とは守りたくなる衝動に駆られる出来の悪い人間と認識されたが、柊はそれに気づくことなく苦笑いをする。

一つの糸が芽生えた瞬間、俺は大事なものを失った気がする。

ただ楽器を買いに来ただけなのに。ごめんよ江戸川楽器店……俺は二葉つくしを巻き込んだ……。

表と裏の日常にメタモルフォーゼ

裏の日常 ソレは突然やつてくる。

バンドの練習の終わり、いつもなら日が沈むまではやるけれど今日はみんなの予定が合わず、紗夜は生徒会。あこと燐子は用事があつていないので、この場にいるのは俺と友希那とリサの三人。

(あれから大分上達したよな……)

ガールズバンドパーティまであとわずか。終はR o s e l i aというバンドは自分の中で最強。とそこまで思うぐらいには盛り上がりを期待していた。至つてシンプルな感想だが、意外とシンプルな物程良かつたりする。

(ワクワクしてきた……!)

そして俺は目の前にR o s e l i aのポスターが貼つてあるのに気づき、眺めていた。C i R C L Eというライブハウスに、こう身近な人達が映つているのは感慨深いものがある。近くにはスタッフの月島まりなさんがカウンターで何らかの作業をしており、最近入ってきたという新人スタッフが掃除をしていた。

新しく来たスタッフさんは面識は無く、いつも仕事熱心で帽子を深く被つた外見をしている。俺がR o s e l i aのポスターを見続けている事が気になつたのか話しかけてきた。

「君、いつも来ている高校生だよね。ガールズバンド好きなの？」

「はい、好きですよ」

「へえ～やつぱり君もガールズバンド好きなんだね。今の流行だもんねー」

俺と新人スタッフさんが世間話をしているとまりなさんもこちらに気づきこちらにやって來た。

「仕事仕事！」

「あ、はい！すみません！」

まりなさんが急かすと、焦つたように新人スタッフさんは仕事に戻つた。

俺は俺で自分の仕事をやることにした。

「楽器の調整……良し。ステージもさつき確認しておいたし……このぐらいかな。ん？」

知識のない俺はネットで得た情報を頼りに裏方の仕事をこなしていた。そこで視線に気づき、横を見ると合わせ終わつた友希那とリサが何やら小さな袋を持つて來てい

た。

「柊、ちよつといいかしら」

「友希那、リサ。お疲れ様」

「おつかれ～。ちよつと今日はプレゼントがあるんだ～」

心なしか笑顔な友希那と背中に腕を隠しながら何かを持つているリサが来た。

「ドッキリなら嫌だよ」

「違うつて！日頃の感謝のお礼。ね、友希那」

よく言うよ。この前プレゼントとか言つて渡してきたのビリビリグッズじゃないか。リサとあこちゃんのイタズラだつたけど。素直に喜べなくなつたからやめて欲しい。

そして取り出したのはR o s e l i aの文字の書かれている青い薔薇の絵のリストバンド。

「これは世界に6つしかないR o s e l i aのリストバンド。この6人で頂点へ向かつたという証。アナタにも貰つて欲しい」

「ありがとう……友希那。ずっと大事にするよ」

「あれー？何かアタシと反応違くない？」

「リサはこの前のプレゼントの記憶を思い出した方がいいよ。それでもありがとう、仲

間つて感じがするよ。大事にする」

「……そうね。終、もつと自分を大事にした方がいいわ」

「え……何言つてんだよ。俺は――」

俺は――裏切り者。

意識は表へと戻る。

「ハツ!? はあ……はあ……」

昨日作つたばかりの簡易ベッドから目覚めると、熱い動悸が激しい。開放感のあるアトリエには窓がたくさん付いており、そこから暖かい日の光が差し込んでは照らしていった。そうだ、俺は昨日からこのアトリエに住み始めたんだ。

(過去という観たくもない夢を見たな……)

首を横に向けてアトリエ全体を見渡す。ふにっと柔らかいモノに触れたと思つたら横で寝ている七深の身体だつた。七深を起こさないように俺は身支度を整える……起

こきないようになんか?」

「ううおわああああああああ!!?」

「んう……どうしたの? しゅーくん……」

「なんでここにいんだよっ!!!!」

この広町家のアトリエは実際の家とは少し離れた場所に存在する。俺はアトリエに必要最低限の荷物を置いて住まわせてもらっているが、七深は自分の家に自分の部屋があるはずだ。

「しゅーくんが寂しくて眠れないかなーって」

「頼んでない」

「それに婚約者ならこれが普通だと思つて」

「普通じやない……はあ」

七深がどうして俺に入れ込むのかがわからない。弦巻としても広町と関係はなかつたはずだ。親父がなにかしてたらわからぬけど……。

「俺はそんな褒められた人間じやない。七深は何か勘違いをしているよ」

「そうかなあ。自分を犠牲に妹を守るなんてそういう出来ないよ」

「……それを勘違いつて言うんだよ、どこで聞いたのか知らないけどさ」

俺は自分の力の無さを見せた様なもの。非情な現実では、楽しんだ者勝ちなんだつな。まさかそれを証明する人間がいたなんて思いも寄らなかつたのだが。

広町七深は俺の長所だけを知つてゐるだけなんじやないか。お見合いした時に嘘。プロフィールに釣られて実際に会つたらアトリエに住み着く人間のクズですどうもありがとうございました。みたいになつてしまふ事が本当に不安で仕方がない。

「だからだな俺は……やべ、そろそろ時間だ。ほら、さつさと学校行くぞ。練習するんだろ」

「あ、うん。今日は一緒にお弁当食べようね」

そうして制服に着替え始める。なんだかもう七深が俺のことを色々と覚えてしまつたのが同棲を強調しているようで恥ずかしい。

七深が俺のネクタイを慣れないと手つきで結んでくれる。俺が自分の身なりを大事な場以外で整えない事すらわかっている。

(ペットというか……そんな扱い?)

よく広町の家族は俺を受け入れたものだと初めてこの話を聞いてから今でも不思議に思つてゐる。



「なあなあ見てくれよしゅう！あたしのギター。クールだろ！」

七深と登校すると、俺を発見した有名人。桐ヶ谷透子は両手で黒のギターを抱えながら突っ込んで来た。月ノ森のお嬢様方って怖い、欲しいと思ったなら楽器ぐらい、ぽんつて買える。おにぎりかサンドウイッチを悩むぐらいの感覚。

「俺はそのギターがお前の物になる前から見てるから知ってるつて」

大体昨日見せてきただろ。SNSでも投稿してたし。

SNSは俺は苦手なのであまりやらないが無理やり透子に登録されたのでニュースをチェックがてら開くと、こいつのトーケンがうるさい。

だがそれと同時にたくさんのコメントや高評価が付いている辺り、人気者なんだなあと実感が出てくる。

「そんな事言わずにもつと見ろつて！ほらほら！」

ギターを俺の前に見せつけるせいで顔が近い。透子は本当に一つ一つに喜怒哀楽を感じるから見ていて飽きない。

「あの……見るのは顏じやなくてギターだつて！」

「ああ、ごめんつい見惚れちゃつて」

「えつ？」

「お前のその可愛い顔にな！あーっはつはつは！」

「……ツ！しゅうのバカアアアア！！」

やつちまつた。頭を少し搔きながら失敗したと思考する。ああやつてイジつていたのは丸山彩だけだった。

(なんでこう俺つて資格もないくせに人試す様な真似しちゃうかな)

このノリが無意識に出てきちゃうつて、信用できる奴だつて頭では分かつていても心のどこかでは信じられてないのかな……透子も七深もつくしも倉田さんも。どこか無理をしている俺に気を使つているだけだ。

(きつとこのままじや下らない事に巻き込んじやうかもな……そうなる前に)

「こらつ！今暗い事考えてたでしょー。広町の目はごまかせないよ～？」
「……どうしてそう思つた？」

広町七深。俺は段々彼女が怖くなってきた。今のやりとりを見て？少しの間で？おつとりとしていて実は自分の全てを見透かされてるかもしれない。

「そのチャラい喋り方した後つて少し思い詰めてる顔してる。今日は少しそれが長かつた」

「……七深ってメンタリズムの天才だつたりする？」

「えつ!? いやーこれぐらい普通だよ！ 普通！」

「確かに広町の言つてることわかる氣する。しゆうつて初めて会つた時から無理に明るくしてたつてか、うーん」

調子を整えて帰つてきた透子が俺の不自然さについて言及する。七深を含めて俺の席に集まつてきた。ギターはしまつたらしい。自慢したかつただけなのか。

「ズレているつて言いたいのか？」

「ツ!」

「そう！ それ、多分八潮なら『動物が身を守る防衛本能ね』みたいな事言いそう

うげーと明らかに嫌そな顔する透子。苦手なのか。

「八潮つて誰？」

「八潮瑠唯。容姿端麗、学業優秀、スポーツ万能。その上、中等部の頃から生徒会のメンバーなんだよね

「へえー、女性版の俺じゃん」

「そういうのいいから

「すいません」

七深の解説に茶々を入れるとさつきの事を思い出したのか透子に怒られてしまった。

「しゅうには縁のない女性だよなあ～ふふつ」

俺は所詮、頂点には立たない人間だと言いたいのかコラ。てめーギターぶつ壊すぞ。次の日には何事も無かつたかのように戻つてきそうだけど。

「まあまあ、本人に直接そんな事言つたらかわいそらだよ」

「あの七深さん、それが地味に一番傷つくス……」

クラスメイト達は俺をからかう事に特化されているのか。助けてくれつくし。こういうのはお前の役目だろう。もちろん学級委員長的な意味ではない。

こんな友人達と今日も一日授業を受けていく……。

退屈だ……退屈過ぎる……。流石に3年が1年の授業受けるとか辛すぎ……。もう……眠い……飯になつたら起こしてくれ透子……。

＼＼＼＼＼＼＼＼

裏の日常は進み始める……。

今でも明確に思い出せる……ソノ記憶。アレは俺の初恋の人が死んだ後から始ました。今でも終わつたのかすらわからない。ただ一つ言えるのは俺とR o s e l i aは一瞬にして関係を断たれた。

俺はライブの支度をするために友希那達と別れた。自分には関係のない裏方の仕事もあつたが、いい経験にはなるだろうと引き受けていつた。やつぱりガールズバンドは人気になつていく、それ程までに魅力的なんだと俺は何故か自分が嬉しくなる。

そんな日の暗い帰り道。突如誰かに俺は後ろから首を絞められる。いや絞められた事に気づくのに時間がかかった。なんで？どうして？俺はひたすら脳に疑問を浮かばせていつた。だからどうなるつてわけでもないのだが。

「なーんだ。君、R o s e l i aがいないとなあーんにも出来ないじやないか」
(やめてくれ……)

「R o s e l i aの皆、可愛いよね～君が入れ込むのもわかるよ……大事ならわかるよね？」弦巻くんさあ、彼女達の前から消えてよ。ね？」

(どうせハツタリだろ……R o s e l i aの事を信じる！)

こんな時に思いつくのは……俺の祖父は俺が嫌いということ。
あの人は……俺を消すために力と権力を振るう人だった。

『堂崎つてアレだろ？ 弦巻の権力で自分に不都合な事を隠蔽してるらしいぜ』

『マジで？ うつわゝ確かに根暗っぽいって思つてたけどやつぱそういうやつなんだ
（そんな事していいない!!!）』

酸素が薄れて意識が遠のく。弦巻の広めた嘘が、噂が、現実を隠して覆う。

それはこの世の中も俺の頭の中も同じで結局は理不尽という感情だけが残る。

「アハハツ！ そういえば妹のこころちゃん、お兄さんの事心配してたよー。最近家に
帰つてないらしいじやない」

（!? こころに手を出すな！）

『妹の弦巻こころさんはあんなにも優秀なのに……』

『こころちゃんつて可愛いよな……一緒に居て心休まるつてか。兄貴は正反対だけど』

（黙れツ……!!）

「勿論、しばらく身を隠してくれるよね。得意分野だもんねえ君の。い／＼つつも現実
から逃げてる」

『巻き込まれることちの身にもなれつての不良貴族が』
『やはり弦巻終は噂通りのクズだつた』

(.....)

「沈黙は肯定と見なすよ。じゃあね、人殺し」

その言葉と共に俺は崩れてしまつた。物理的も精神的にも……。誰かもわからない人は消えていった。

広めた訳でもないのに事実無根の噂が不自然に自分の周りを駆け抜けていく。人殺しなんかしてない。見捨てたのは俺じゃない……。何をどうすればいいのかわからない……。

長考の末に俺はその日からR o s e l i a ではなくなつた。正確には身を隠すこととした。それにこの世の中はイメージが大事だ。俺がやらかして問題起こすのはまだいい。一番駄目なのはそれでR o s e l i a に迷惑が掛かることだ。イメージが悪くなつてしまつたら俺は生きていけないかもしない……。

こんな事して得があるのはただ一人。あのジジイ……!
 （情けない……情けない……情けないッ!!!）

過去を捨てず、引きずられないで先へ進める前向きな人間が羨ましい。
 「……もつと立派な人間になつてやる」

ボソッと決意を呟いた。その声は俺にしか聞こえない、俺を肯定するための自己暗示

だつた。

たまには本気の青春を

「…………きて」

人が微睡んでいるのに誰かが邪魔をする……。肩を揺らして起こそうとしている。
なんとか意識の紐を手繰り寄せて脳を起こす。

「ほら……起きて！」

「ふわあ～……今何時？」

「もうお昼だよ～」

「まさか本当に昼まで寝てると思わなかつた」

生徒達は各自動いており、休み時間に突入しているのが騒がしさで理解した。

「……マジで？」

「ぐつすりだつたねー」

最近、深く眠れない。何故なら過去の夢ばかり見るからだ。だからといって午前中全部寝てしまうのはどうなのだろう。この高貴なる月ノ森生としてね！※この前サボりました。

「そーいや二葉が教室借りたらしいよ」

桐ヶ谷透子は今日も派手な見た目をしているが、俺の数少ない友人として話しかけてくれる。広町七深もその変人タイプの人間だ。月ノ森生自体、あんまりまともなのがいない気がするけど……恵まれて大切に育てられたお嬢様方のはずなんだけどなあーあれー?」

「よつしや!月ノ森の庭園とか虫だらけで嫌だつたんだよなー」

「しゅーくん、よくこの短期間で虫とか観察してたね」

「え?これぐらい普通だよー」

「あー!それ私の真似ー?」

アトリエに住みはじめて寝る前、自分の内で広町七深という人間を頭の中で整理していた。はつきり言つてこの子普通じやない。この際、俺との関係性とか無しにして、考えてみても明らかに七深は自分自身をを騙している。過去の自分を消し去つて……犠牲にして。きっと根本的な部分が俺と似ている。そこに七深は親近感を覚えたのかは知らないが悪い人ではないのは確かだ。

「モノマネうまっ!一瞬本物かと思つたじやん!」

「これも演技派女優の力添えのお陰でございます」

演技派女優?と首を傾げる透子。

芸能界で生き残るために、白鷺千聖には芸を身につけると言われただけだった。人を

真似る事なら任せろ。まあ、意外な特技ってだけで今は何の関係もないけど。

「そんな事よりみんなでお弁当食べようよ！つーちゃんとしろちゃんも誘つてさー」「しゅうは弁当なんて持つてきてないんじゃね？」

「ふつふつふ、この広町がしゅーくんの分まで作つてきましたー！」

「え、広町がしゅうの作つてきたの？」

「作つてくれたらしい」

正直俺は、何でもしてくれるのは嬉しいけれど、頑張りすぎていなかが心配だ。七深が楽しくやつてくれてるならそれでいい—— つて違う！

俺は今日こそ広町七深の真実を知る。誰か情報を知つている人で協力者がいればいいのだが……。そんな都合よくいるわけがないな。

「おーい！柊くん、この前の学力テスト受けてないでしょ」

隣の教室から来たであろうひよこつと現れた小さな少女は二葉つくし。相変わらず学級委員長の仕事を果たしているようだ。何やら面倒事の予感……。

「あ、つーちゃん。丁度誘おうと思つてたんだ」

「そうそう、二葉も倉田も一緒に弁当食おうぜ！」

「もちろん！……その前に、柊くん！ テ・ス・ト」

「テスト？ なんそーれ」

（あれ……いつの間にか名前呼びになつてる……しゅーくんつて人に好かれる天才？でもここだと……天然ジゴロ？）

「学力テスト、本当はもう受けているはずなんだけど……どこの誰かさんがサボつちゃつたからね～受けないんだよねー誰かさんがねー！」

テンポに合わせて誰かさんに叱るつくし。近づいて威圧を与えるとしているのか。全然威圧になつてないぞ。というか近い。

「えー！ でも俺授業で疲れてるしい～～～」

「うつ……で、でも！ 受けないと先生が結果貼れないし……」

「あはは……」

「今まで寝てたから疲れてるわけないって」

「寝てた……？」

「はい受けに行きます。行きましょう！ 今すぐ！ 俺の飯取つといて！ あと先食つていいからーー！！」

これ以上我がつくし様を怒らせるわけには行かないでのダツシユで職員室へ向かうのであつた。残された少女三人は顔を合わせて呆れ、ため息、苦笑いと三者三様の対応

をする。

「……倉田誘つて昼にしよ、マジお腹ペコペコ」

「そうだね……はあ」

「ねえ……つーちゃん。しゅーくんつて格好いいよね」

「一葉つくしはいきなり飛び出した発言に驚いていた。

それは横にいた桐ヶ谷透子も同じく。だが置いてかれていた。

「広町、ど、どうしたん？」

広町七深の目は輝いていた。濁っていたわけではない。むしろこれは羨望や憧れに近いかも知れない。

「普通なのにその中に輝く無限の可能性が凄く好きなんだ」

普通と無限の可能性。私なら普通という前者より、無限の可能性という後者の方が魅力を感じている。彼女はその逆のようだ。

(……)これが柊くんの言つていた解除すべき婚約者つてやつなのかな。確かに広町さん、何かに依存してるとか……)

本当は自信なんてない。月ノ森生として堂々と言える長所も無い。無いからこそ言い訳なんかしたくない。無理だとか人のせいにするつてことが一番駄目なんだ！
(よし！私は頼られるべきリーダーなんだ！あの柊くんの頼みで仕方なく、本当はやり

たくないけど彼女役を引き受けたんだ！」

「うん、格好良い。抜けててしつかりやりそな所とか素敵だよね」（本当はそんなこと思つてないよ!!!）

「でもでも、寝起きとか意外と抜けてる所もあるんだよ」

「人のやりたいこと応援してくれる所とか！」

（全然嬉しくなんてなかつたし！）

「ノリがいいよね♪」

「でも――――――」

「いやいや――――――」

（おばあさま、もしかして……もしかしてこれって修羅場つてやつですか―――!?!?）

「これが……月ノ森生なんだ……」

今、この中でこの場を収められる人間はいなかつた。後から來た倉田ましろは二葉つくしをすぐを追つてきたはずなのに、現状を理解できない。言い方が悪いけれど、堂崎終も才能が冴えない自分と同じタイプの人間だと思い、そんな人間と友達になれて安心していた。なのだが月ノ森生徒の次元の違いを思い知つた！※倉田ましろは何も知りません

全員が全員どこかズレている空間を置き去つて堂崎柊はひたすらペンを動かしてい
た。担任の教師と向かい合つてるので自然と面談に似た形になつていた。

「そういえば堂崎さん、昼食は済ませましたか？」

「いえ、まだです。丁度昼にしようとしたら呼ばれてしまつたので」

「おかしいですね、二葉さんには昼食の後でいいと言つたはずなのですが……」

「まあつく……二葉ですし……ああいう所が可愛いんじやないですかね」

おのれつくし。大事な伝達を忘れてるんじやainいぞ。

「堂崎さんは女性にモテそうですね」

「何故急に？」

「なんとなくそう思つたんです。貴方はいずれ大物になるかもしませんね」

「いつか期待に応えてみせたいです。期待されたの久しぶりなんで……それじや全部終
わつたんで提出しどきますね」

「はい、ありがとうございます。もう堂崎さんのだけなので今日の午後には結果が貼り
出されるでしよう。それでは」

腹減つた……そして疲れた。学力テストといつても短いやつでガチガチに成績が出
るタイプのではなかつた。昔の知恵をかき集めて大体三十分ぐらいで終わつたがきつ

と俺の努力だけでは答えられなかつた。

テスト自体は難しい……のだろう。さすが月ノ森といったところか。でも……（フツ……今の俺の学力に問題はない！）

紗夜やPastelle*Pallettesの知識は無駄にしない……だつて俺はそういう才能を含めて堂崎柊だから。まあどうでもいいか。

「さあーてど、七深ちゃんの美味しい美味しいお弁当タイムに突入——

「辛えええええええ———つ!!!!」

テスト終わり、透子からのいつもの場所にに来てとの連絡が來ていた。いつもの場所？と思つていたが、窓から外を見ると目立つというかわかりやすい女子4人がいた。何故か七深とつくしからも同じ数のメッセージが來ていた。……何やつてんだ。俺の知らないところで競うな。

向かうと昼食は後から來た俺のみになつてた。女子が少食つてものあると思う。あんまり見られてると食べづらいな。

「えつ！」

「ま、マジ？」
「マジマジ!!!ほら、あーん」

透子が辛さに悶える俺を興味本位で見ていたので試しにあげてみる。
「んつ……確かにこれからーい！……一緒に虹を飲んだらしい感じ！」

飲まねえよ。ミルクティーが嫌いになりかけたぞ。

「なあくにい人の作つたお弁当であーんしてるのはかなあ

「痛い、痛いです七深さん、ついでに口も中も痛いです」

そんなに透子に食わせたくなかつたのか。かわいそうな我が友……。だからといつてつねらないでください。ダブルアタックすぎる。

「それでテストどうだつたの？」

「ん？倉田さん、お弁当箱が俺の理想だね。流石月ノ森で一番尊敬する倉田さんだ」

（やつぱり堂崎くんもちよつと変わつた人かも……）

「え、あ、ありがとう

「無視しないでよ！」

少し怒った顔をするつくし。

「ははっ、怒る顔が見たかつたんだよ。可愛いから」

「なつ……!?」

「はつはつはあ！また赤くなつたなこいつう！可愛いやつめ！撫でてやろう！撫でてやろう！」

「や、やめてよ！髪が崩れちゃう！」

「そんなのいつでも直してやるつて」

「それは撫でていい理由になつてなーい！」

「…………」「」

(あの堂崎くんって……実はものすごく異性との距離感を掴むの下手というか……わざとやつてるの？って思うし、本人が妹扱いしてるつもりでも相手にとつてはただの口説き文句になつちやう……あと二人が少し怖い)

「て、テストどうだつたの堂崎君！」

ならここは私が流れを変えます！と話を戻す倉田ましろ。引っ込み思案で暗い自分を変えたくてバンドを始めた彼女だが、最近は変人な友人のせいで少し明るくなつたかもしれない。

「ん？んー…俺的には満点かな。別に詰まる所なかつたよな」

「強がんなよ～結果でバレんだぞ？あたしには分かる。お前はあたしと同類だ」「ふつ……舐めんなよ？本気出した俺は凄いぞ。なんならここで全てを曝け出してもいいぜ」

「はい逮捕」

ただでさえ危うい状況なので逮捕しないでください。

「まともな話、テストは午後に結果が出るからそこで透子と俺の違いを見るといい

「言つたな！もしかたしより下ならバカにしてやつからな！」

「仮にも私達、月ノ森生だよ。そこの学力では解けない難問だつて多いんだから！」
と、透子とつくしは自信満々に答える。そういえば倉田さんは別の学校からやつて來た人だと聞いた。そんな難問を出す学校に合格するつてやつぱり素の能力じやあ勝てないかもな……。

「よしじやあ、しゅうが口だけ野郎なのか確かめに行こー！」

そういうつて肩を組んでくる透子。もし俺より下ならギターぶつ壊すぞ。
もしくは有り金全部を虹に突っ込ませてやる。

昼休みから放課後へ……。

「テストの結果が貼り出されたよー！」

つくしと倉田さんが2人で一緒に来た。みんなで結果を見ようと期待を込めて来てくれた。俺らも席を立ち、校内掲示板へ向かうこととした。

「楽しみだね～しゅーくん」

「ああ、今から透子の泣き顔を見るのが楽しみだ」

「なんであたしが負ける前提!? 泣かないし！」

「もし100位以内ならコンビニでスイーツ買ってあげるから！」

「子どもか……俺は」

「堂崎くんは勉強したの？」

「してない。俺がしたって大した能力得られないし」

「……？」

倉田ましろは堂崎柊の変な物言いに疑問を感じた。今でも十分すぎるから別に勉強なんてしなくていいという事だろうか。彼を知れば知るほどましろは自分との違いに少し卑屈になつてしまふ。プラスにしろマイナスにしろ堂崎柊は倉田ましろに何かしら影響を与えていた。本人達は気づいていないけれど。

「あつたあつた……」

「えーとどれどれ……」

「えつ!?」

「これって……」

1位 堂崎 栄

八潮 瑞唯

2位……
3位……

「あれ？あれ——？桐ヶ谷さん？透子さん？カリスマさん？」

「1位つて……マジで？」

「えー！凄いじやん！柊くん、何だか私も嬉しくなっちゃった」

はつはつはつ！このオタクも認める生き字引と言われた俺の知識をナメるなよ！いやあ～気分は最高だなあ！ハイになりそう。

『ねえ、見た？ 1位の人……B組の噂の人だよね』

『うん！ なんか格好いいよね……連絡先交換しちゃおうかな』

「またしゅーくんが人気者に……」

「うわあ、やっぱりすごいなあ……あがが出来る人なんだ』

たかがテストにワイワイと盛り上がる俺達。その集団に一人の凛とした淑女が近づいていた。

「こりや透子、俺を馬鹿にしたのでギター壊しの
「ちょっといいかしら」

「はい？」

いきなり後ろから肩を掴まれた。今まで有頂天だつたので間抜けな声が出てしまつたが、教師ではなさそうだ。

「ずっと貴方を待っていたわ……堂崎さん」

ドンッ!!

そのまま壁に押しつけられた。逃げられないようにか片方の手を壁につけて封じ込められた。

これって壁ドンってやつですか……？

「この私を忘れたとは言わせないわよ」

俺は緊張のあまり喉を鳴らしてしまった。そりだなんでも俺は忘れていたんだ！ 彼女とはいつも一緒に居たじゃないか！ 楽しい時も辛い時も昔受けた音楽の大会の時も！ いつもライバルとして張り合つてた……認め合い切磋琢磨してきた！

そして俺は――口を開く。ちゃんと言うんだ。見て。

「え、いや……誰？」

八潮瑠唯は俺の協力者

「え？ ジャあ今の人人が八潮瑠唯なのか！？」

結局あの後チャイムが鳴つて下校時間になつたからか、それとも生徒会の仕事なのか知らないけど、話の最中だらうが時間通りに離れて行つてしまつた。ロボットかな。結果俺だけが意味もなく目立つてしまつたんだけど。どうしてくれるの八潮。

「うん、どうして柊くんの所に来たんだろうね」

「待つていた、とかなんとか言つてなかつた？」

「お前らは関係ないの？」

俺達は先程起こつた出来事を話し合い、つくしの借りたという教室へ向かつてゐる。

無駄に広いな……月ノ森。

「ないよ！ それに私、八潮さんに初めてちゃんと会つたから……」

「それにしゅーくんの事、知つてそうだつたけど」

「知らない知らない。あんな綺麗な人忘れないって

本当に堂崎柊は知らない。まさか回想したほとんどが現実であつたことを。

「だろうね……」

「胸……おつきいもんね」

そこは関係ないです。ああ！そんな目しないで帰ってきてーー！呆れないでください、そういうお年頃なんです。

「ま、まあ八潮瑠唯については追々考えるとして、今日は空き教室に行こうか」

「その必要は無いわ」

気持ちを切り替えようとした次の瞬間。当の本人、八潮瑠唯が登場した。テストの結果の貼り出された時といい、俺に話があるのは間違いない。そこで俺は追々考えるとは言つたが、せつかくなので向こうの提案に乗ることにした。

「少し時間を貰つてもいい？」

「わかった。ちょっと行ってくる……場所を変えようか」

「そうして俺は八潮と庭園に向かう。

「いってら〜」

「八潮さん、やつぱり堂崎君のこと何か知つてるのかな」

「さあ……」

「ほら！私達は練習しましよう！」

場所は移動して庭園、目的地に辿り着く前までに余計な会話はひとつもなかつた。時間はそろそろ日が落ちてきそうだ。話とは一体なんだろうか……。いいところまで来た……そして俺らは対峙する。

「八潮……瑠唯。キミは何者だ」

「貴方……その変な格好に喋り方は誰に影響されたの」

今の柊の見た目は染められた黒髪と流通していない学ランのボタンを閉める事無く開けている。褒められた格好じやない。

「そんなことは今はいい。俺のことを知つているって事でいいのかね。本当に申し訳ないが俺はアンタの事を知らないんだ」

「……なら弦巻終ならわかるつてことかしら」

「……もう誰も俺の事を教えてくれないんだ。誰も知らない」

演じてる事はある。でも昔を思い出すればするほど吐き気がする。まるで胃と心が繋がっているかようだ。

「でもこれでいいんだ。これなら日常を送れる！もう弦巻を気にすることも無い!!」

「呆れた……言い訳をするにしてももつとマシな事言うと思つてた。そんなの昔の貴方なら当然のように笑つて乗り越えたわ」

「弦巻なんて……昔なんて……八潮が望む俺なんてどこにもいない」
「…………」

八潮は喋らない、俺も喋れない。話すことがないから、弦巻終はトラウマを抱えているから。そんなの……格好悪くて普通じやないから。

家からも愛されてないなんて知られたら友達出来ないし、外ではいつも仮面を被つて、足搔いて……生きて。ずっと辛かつた。

「…………取引しましよう、堂崎柊」

「だから、君の望むことなんて出来ないって」

「私は弦巻終じやなくて堂崎柊に話しかけているのだけど」
「…………」

分からぬ。八潮の伝えたい事がさっぱり分からぬ。それに今の情報量じやあ八潮瑠唯という人間について詳しく分からぬ。

「私は貴方が過去と向きあえる協力をする。その代わり貴方は私の手助けをしてくれるだけでいい」

「お前にメリットがないだろ。なんでこんな事するんだ」

「そうね……罪滅ぼし、かしら」

「は？」

「なんでもないわ。つまらない事言つたわね」

独り言のように呟いた八潮は、少し悲しげな顔をしていた。俺の見間違いじや無ければの話だが。

「それで、やるの？やらないの？」

「……出来る限りの協力ならやろう」

「わかったわ。これで私達は今日から協力関係ね」

八潮瑠唯。てっきりよくもテスト1位で私の上取りやがったな表出ろやと言われるかと思つたけど、大丈夫だつたようだ。

「八潮つていいヤツなんだな。マジ天国へ行けるよ～」

「それはどういう意味？」

「俺の月ノ森で初めて出会つた人の真似さ。ちよつと似てなかつたかな」

「それをする意味は？」

「えっ!? だってほら面白いだろ?」

「貴方つてギヤグの才能ないのね……」

「はあ!? お前にその面で『可哀想な子……つまらないのに気づかないのね……』って顔されるのすげー腹立つ!」

俺が笑いながらキレかけていると、はいはい無視無視つて感じで八潮が俺の手に一つの紙切れを渡してきた。

「……何これ」

「私の電話番号とメッセージアプリのID。これで貴方に手伝つて欲しい事を伝えていくわ」

え、八潮は俺がこの提案を受ける前提でこの紙を用意してたつてコト!? そう思うとめちゃくちや可愛いんですけど!

「わかった、俺も夜寂しくなつたらかける」

「やめて」

俺は八潮の話が終わつたと思い、背を向けるそこでまた肩を掴まれた。クソつ! つくしなら身長が足りないから肩を掴めないので!

「まだ話は終わつていないわ」

「後何かあるのか?」

「貴方に送る最初の依頼。広町七深の友人になりなさい」

普通に考えたら婚約者→友人という元カノ的なグレートダウンだ。しかし俺はこの依頼に妙な納得感を覚えた。そりやそうだ、普通を知らない人に普通に考えたら、なんて通用する訳がない。

「今から話すことは広町さんの過去。広町七深は昔、あらゆる物、あらゆる技術で天才な才能を持つていた。今とは違うわね。誰よりも特別な存在だった」

「…………続けて」

「けれど非凡な才能を持った広町七深はいつの頃からか普通になってしまった」「また普通か……」

「成長とともに平凡な能力に落ち着く人もいる。貴方はその逆ね。いやそれとももつと違う才能か」

「俺の事はいいから、詳しく聞かせてくれ」

「広町さんは普通のフリをしているだけ。彼女は本当の自分を知られるのが怖いのよ。貴方と一緒にね。違うとすれば貴方は普通のフリなんて全くしていいけれど」

「俺は道化師ですよーすみませんでしたあー」

「このままだと彼女は絶対ボロを出すわ。優秀でありたい人間が優秀過ぎると嫌われる

「なんて皮肉な話よね」

「だから私には尚更理解できないのよ。才能を磨くこの月ノ森で自分の才能を隠す必要なんてないでしょう」

「でもそうしないと生きられないならそうするだろう。本人しか分からぬ悩みに勝手に首を突っ込んでいいものなのか」

「そうね……私には分からぬ。それは私が普通とか普通じやないとかそういう問題ではなくて、根本的な部分が違うのよ。だからこそ貴方なら分かる」

「……あとで俺の頼みもちゃんと聞けよ」

「答えは肯定でいいのね」

「この問題は俺が解決してやる。八潮瑠唯、これからも頼むぞ」

「瑠唯でいいわ、遠慮の無い関係でいきたいの」

「年上なのに八潮さん、つて言つたらそれこそ隠しすぎよ」

「瑠唯ね……了解。じゃあまた今度」

広町七深の情報を手に入れた。この話は本当なのだろうか……瑠唯の奴が嘘をつくタイプだとは思えないが、自分の目で確かめてみよう。

「普通だつて……笑っちゃうよな。そんなのアツラにとつてはどうでもいいのに」

それが七深の悩みの種なら解決してやろう。俺なら……いやこれは俺しか出来ない

依頼。瑠唯と別れて空き教室へ戻った……。



「ういー、戻つたぞー。どういう状況?」

「あ、堂崎君。おかげり。今は透子ちゃんがスタジオ借りたいって言つたんだけど、それは無理だつて二葉さんが言つた所だよ」

俺は瑠唯の言つたことをずつと考えていた。瑠唯は唯一、俺と七深の本当の姿を知っている。その瑠唯が俺に頼んだのだ。つまりこの問題は並大抵の人間じや解決出来ませんよつてことだ。

「お前……透子、そりや無理だつて。ガールズバンドの人気知らないのか?」

「えー! でもやりたくね!あの設備、あの響く環境!」

「やっぱりガールズバンドブームのせいだよね」

「楽器背負つてる高校生、街でよく見るもんねー。放課後の時間はスタジオの取り合

「いつてことかあー」

「あ、そうだ。バンドをやるからには何か目標を決めない？」

「目標ね。あつた方がいいんじやないか。モチベーションを保てる一つの工夫だな」
間違いではない。ただ最初から高い目標を設定してはいけない。簡単なやつからクリアしてつて自信を付けていくのだ。そう難しい目標を設定するわけ――。

「じやあ目標は100000人ライブだな！」

「透子おおおおおお!!! お前何してくれてんだあああああ!! ギターぶつ壊すぞコラああああ!!」

「なんでえ!?」

「100000人ライブかあ……とりあえずそれにする?」

「…………」

「どうしたの? 栄くん、広町さんの顔に何かついてるの?」

「いや、何も」

「なんでだよ! 広町も同じこと言つたんだからベース壊せよおー! あたししゅうにギター壊されたくないって!」

「はいはーいありがとうございまーす。じゃあ当面の目標は月ノ森の音楽祭ね」

「聞けよ!!!」

「月ノ森音楽祭……いいね！私もそれがいいと思う！」

俺はある程度つくしに目標を伝えたら、つくしは七深と一緒に倉田さんに月ノ森音楽祭について教えている。透子と会話しながら七深を深く観察する。分かるのは今日も可愛いところか。つてそれ関係ないやないかーい!!!

「しゅうー！しゅうくーん？もしもーし！」

「ギターなんて壊れたつて俺規模で考えたらミクロンミクロン！」

「マネするなあああああ!!!」

本当この桐ヶ谷透子は騒がしい。一緒にいて飽きないやつではあるんだが、雑な所も目立つ。もし本当に桐ヶ谷透子の銅像が学園に建つたらイタズラしてやろう。そうしよう。例えば銅像と透子の身体の感度が連動するとか。うわめっちゃ楽しそう。

「わ、私もいいと思うなー！音楽祭！いい目標だねー！」

「でも、それすごい人ばかりばっかり出るんじや…」

どうやら話は少し進んだようだ。100000人ライブとか全く、透子は仕方ないやつだな。家は呉服屋らしいし、今度服について付き合つてもらおう。

「当然でしょ。なんたつて月ノ森のイベントだもん」

「まあみんなは負けないさ。誰にも引けを取らないと思う」

「そ、そんなうまくいくかな……」

「練習さえすればね」

俺は練習を見てはいるが、頭の中では七深との関係を変える策をひたすら考えていた
……。

広町七深を俺は救う

誰だつて触れられたくない過去はある。勿論それは堂崎柊も例外ではない。

いつから普通じやないと気づいたのか。なんでこの星に産まれたんだろうと哲学を考えるぐらいには現実逃避をし、異常さとその意味を知りたかった。いや確かに俺は普通だつたはずだ。

『この能無しめ。自由な時間を与えればお前もちょっとマシになるかと思つたんだが……』

家庭環境、普通じやない。

『ずうーっと騙してたんだな』

『お前なんかと友達になるんじやなかつた。二度と話しかけてくんnyaよ』
友人関係、普通じやない。

『柊あんま恥ずかしがんないで〜』

『なんで女装しなくちゃいけないんだよ！』

『いいじやん！いいじやん！思つたより似合つてるつて！』

『ぜんつぜん！嬉しくねえ！』

『柊……この猫耳を……』

『つけねえから！』

幼馴染は、まあ……普通じやない。

とにかく柊はいつから普通じやなくなつたのか。自分は何故天才なのか。月ノ森に来るまで色んな人と交流したし、自分自身を磨いてきたけれど、俺は天才である事を誇っている訳じやない。むしろ申し訳ないぐらいだ。俺の才能は全て人の物だ。

その人の経験は俺の経験となりそれは俺の技術となる。

この力に気づいたのはある姉妹のおかげだ。

冰川紗夜で異変を感じ、冰川日菜で異常だと理解した。

人の技術や能力を経験や過程を見て自分に取り込み、真似をする。

要するに人の能力を自分の物へと吸収する天才と柊は名付けている。

人を観察する天才的センスにより、長期間その人物を観察する。もしくは経験が一番現れる手に触るとその人物の能力を真似できる。

手に触れて真似できるようになつたのは冰川日菜の天才さを吸収してしまつて俺の

天才部分が敏感になつてしまつた。日菜の力が大きすぎたせいだ。

しかし、その力を使うかどうかは本人の意思次第。

そりや超能力じやないから調整出来る。だからといって人間なのでアニメみたいな事は真似できない。

元々ばつちであり、幼馴染の力を取りたくなかつた柊は何にも吸収していないただの凡人であり、自分で努力することに才能はない。故に堂崎柊は自分を辞書で見る普通、と勘違いしていたのであつた。

あれ、俺歌こんな上手かつたつけ？

あれ、俺こんなにコミュ力あつたつけ？

レベルだつたのだから。

よつて人の才能を真似する事しかできない天才は、一般的な普通だと自分自身が消えてしまう為、無意識に苦手になつてしまつたのだ。

堂崎柊は努力の天才ではない。人の技術^{才能}を盗む天才だつたのだ



「しゅう！お願い！ギター教えて！」

「……はあ、透子。お前のいつものその厚い人望で有名ギタリストでも探せよ」

月ノ森音楽祭に向けて練習の日々が続いている。そんな中、とある日の休み時間。桐ヶ谷透子はまたしても俺に音楽の教えを請う。

「大体なんで俺なんだよ。この学園を隅々まで探せばギターやつてましたって子いるだろ？」

「あたしはお前に教えて欲しいんだよ！ そうでもしないとあたしだけ仲良くなれないだろ！」

「別に今のままで仲良いつて……確かに俺は目標も出したし、透子の事は嫌いじやないけどそもそも俺には教える能力がない。今は月ノ森生になつてはいるが俺は一流じゃないぞ」

「でもさー、初心者が一人で手探りでやると、教え下手でも経験者がついてくれるのつ

て差があるの思わね？あたし家で練習しないから早く上手くなりたいんだよー！頼む！なんでもするからさー！」

「ほおう？なんでも？」

透子の珍しい本気の頼みに俺は眉を動かす。すると本当は考え込んでいただけなのが、中々喋らない俺を見て何を勘違いしたのか。

「あ、いや！エッチなのは駄目だよ！流石に早過ぎるつてか！そう！全然準備してないからムリ！」

「なんで俺がお前に欲情してる前提なんだ。……何の準備をするつもりだ」

正直俺にとつてコイツがどうなろうと関係ないが、Rosellaの事を広められると困る……。それに有名人の透子に借りを作つておくのも何かの役に立つかもしれない。

桐ヶ谷透子
個人レッスン

昼休み、屋上で俺は七深の愛妻弁当（本人が言つてる）を食べた。透子は和食という

和食を食べていた。今度俺もいつものお返しに自分と七深の分の弁当作って食べさせてあげよう。七深にはギターの練習だからと離れてもらつた。来たそうにしていたけど、悪いが気が散るので教室にいてもらつた。

「それで透子は何を教えてほしいんだ」

「全部!!!なんなら、あたしを最強のギタリストしてよ!」

「お前じや無理だな」

「なんでだよー!…どうしてだよー!」

「そういつて俺の頭を脇で締めてくる。鬱陶しいわ。

「努力してる人間もいる。全力でやつてる人と今の透子じや比べるまでもないよ」

実際そうだ。俺はこの数日間、彼女達を観察していたがどうも貴族の性さがなのか誰もが憧れる月ノ森にいるからなのか、彼女達は自分達は他の人とは違う。断然、私達は優秀。そう考えている節がある。確かに英才教育だとマナーとか、俺ですら受けた事がある。ぶつちやけだから何? つて思つてしまふのは俺が庶民側に近いからか。

「じゃああたしの向いてるやり方を教えてよ」「例えれば……るんつ! て感じでさ」「は?」

「……」めん。今のは俺が悪かった

「透子はノリで弾いてる事が多い。今はそれでもいいけれど、音楽祭ではダメだね。まずは簡単な曲をいくつかマスターしてみなよ」

「えーー！そんなんより、めちゃくちゃ難しい曲を弾けた方が良くね？」

こいつギター初心者なのになんでこんな強気なんだ。これが桐ヶ谷透子の性格なのだろう。

俺はギタリストではないので音楽の例えは出来ないが、俺の趣味でゲームで例えよう。

初めてやるゲームでいきなり最高難易度を選ぶ。まあ出来ないって訳ではないかもしないが、やはり簡単な方を先にクリアしていた方が経験が出来る。俺はそれを透子に学んでほしいのだ。この前、透子にギター家でもやつてる？と聞いたところやつてないと言っていた。だつたら尚更、安定さは欲しいところ。

「まずは慣れと場数を踏む事だろ。その見かけだけの状態でみんなと合わせてみろ、お前だけ失敗するぞ」

「うぐつ……」

「そもそもお前、自分で家で練習するタイプじゃないって言つてんだから簡単なのぐら

いは沢山弾けるようにしとけ。そうしたら実力は後からついてくるよ」

「マジ? そんなの何か変わる?」

「マジマジ。とりあえずギターを慣らせ。透子のセンスなら出来るはずだ。簡単なのをマスターしたら、難しい方に挑戦してもいい。第一にお前、目標を高く設定しそう。10000人ライブとか。自信を持つのは良いことだけど、自分が見えてないのは恥ずかしいぞ」

「あーそつか。あたし、自分が練習不足で恥かくのはいいけど、みんなにはかけられないや」

「なら?」

「やるしかないっしょ!」

そうして俺たちは時間の許す限り、練習に没頭した。これで心意気も変わったことだろう。あとは本当の自信をつけて毎日練習すれば音楽祭でも通用するはずだ。そこは透子に期待しよう。

桐ヶ谷透子のギターの技術が少し上がった気がした……。



時は夕暮れ。学校の空き教室で練習している一ツキノモリ（仮）は下校時刻になつたら帰る事になつていて。やはり部活帰りのこの疲れ加減はいいものだ。

俺たちは今日の成長について雑談していた。すると倉田さんは何を考えていたのかやる気を出し始めた。

「その、私もつとがんばるね……！」

「もう帰りだけど」

「そうじやなくて！私、全然練習についていけてないから、もつとがんばらなくちやつて思つて……」

「あはは、そんなのミクロンミクロン、気にすんなつて」

「そうだよ。練習はまだ始まつたばっかりなんだから」

透子やつくしが励ましている。そういう俺は一回も倉田さんと音楽とか月ノ森とか、腹を割つて話した事がないな。外見は俺の初恋の人に似ているが、内面は詳しく知らない。俺も一応、仲間つてことになつてるし嫌じやないなら今度誘つてみよう。

「でも、どうしてそんなこと思つたの？」

「だつて透子ちゃん、もう何個もコード覚えちゃつたし。二葉さんは久しぶりに叩いたのにドラム上手だし」

「広町さんなんて、もう難しいフレーズまで弾けてるし。迷惑かけないように早く上手くならなくちゃつて……」

（初心者だと聞いてはいたが、やはり七深はずば抜けた才能を持つているな……）
「ま、あたしのセンスは別格だからねー」

「こいつ……殴りてえ。昼間の頼みは何だつたんだ。この可愛さがウザさを生んでいるって意味ですぐ殴りたい。

「ま、まあ、私もこういうのできちやう人だから。ちよつびり本気を出せばあれぐらい余裕で～……」

嘘つけ！ つくしはこの前ドラムは持つてきたのにステイック忘れてやがった。こういうのはできちやう人とは言わない。

「そんなこと言って、つーちゃんは秘密の特訓してるんじやない？」
「ぎくつ！ な、なんのこと!?」

「してたんかい」

「毎日増えてくその手の絆創膏……広町の目はまかせないよ～？」

「まかせなかつたようだ。つくしはドヤ顔が崩される瞬間がたまらなく好きだ。今

度慌てて自爆するときを録画したい。

「むく、広町さんこそ、秘密の特訓してるんじゃないの？」

「え、私？」

「ベース始めたばかりなのにすごい早さで上達してるもん。かなり練習しなくちゃあんなに弾けるはずないよ」

「えーと、別にしてないんだけど……」

おかげで毎日安眠です。夢見は悪いけど。あのアトリエ呪われてるんじゃないのか。嘘です、実は一人でゆっくりしたり、プライベートはしつかりしてるけど開放感のある辺り俺の好みドストライクです。とそこで瑠唯が通りかかる。というかこちらに来ているのか。

「？ 庭園に誰かいる……もう下校の時間だよね？」

「ほら、この前俺を呼んだ八潮瑠唯。……もしかして倉田さんって知らない人は覚えらない人？」

「ご、ごめん」

「まあ女性版の俺つて覚えればいいよ」

「なんでもできちやう人なんだね。すごいなあ……」

「あ、あれ？」

思つていた反応と違う。そこはいやいやどこが堂崎君なの！とツッコんで欲しかつた。これじゃあまるで俺が自己顕示欲の強いナルシスト野郎みたいじゃないか！

「うわあ……」

「しゅーくん……」

「何を言つてるの……」

めつちやドン引きされどる——!!違います！俺もこんなの予想外です！??

「あなた達……。……堂崎さん。貴方がいるなら言つておいて頂戴。最近、騒音がする」と生徒会に苦情が来ているわ」

「そ、騒音……!？」

「もしかしてバンドの練習の音……？」

「バンドの練習？あれは曲だったの？音楽は調和でしよう。教室から聞こえた音は調和しているとは言えないものだつたわ」

「ま、まだ練習始めたばつかなんだからしようがないじやん！」

「それがコンクールでも通用するならみんなそう言うだろうな。それで結果が変わるなら喜んで言つたよ」

「そうね。今ここにあるものがすべてよ」

「しゅーくん……？」

「しゅう！どつちの味方なんだよ！」

「お前達の味方として言つてる。まだ比較対象を知らないから現状に満足出来るかもしない。でもそれは鳥籠の中に入る鳥なんだよ」

安全に過ごしてきた鳥はいきなりの嵐にはとても耐えられない。俺はそれでも羽ばたいたバンドを知つていて。

「教室から聞こえてくるのは音楽とは言えない騒音。迷惑な活動は生徒会の一員として認めることはできないわ」

「ま、待つて！ちゃんと教室の使用許可は生徒会からもらってるんだから！」
さすが俺たちのリーダーだぜ！

「ということは、この申請書を書いたのはあなたね。不備だらけよ。それに誤字脱字が三箇所ある」

ふざけんなよリーダー！

「おい、二葉……全然しつかりしてねーじやん」

「し、しつかりしてるもん！ちょっと見落としただけでしょ！」

「とにかく、教室の使用許可は取り消しね。帰る前に教室にある荷物を片付けて」

「ええっ！」

は？いやいやそれは困る。こんなんで音楽祭出れませんでしたとかになつたら俺に……責任が来る！そしたら俺に普通は訪れない！！ここはやるしかない。

「ちよつと待つたあああ！」

「……堂崎さん？」

「俺に免じて教室は使わせてくれ！このままじや何も掴めない！」

「……わかつたわ。教室の使用許可の申請書を書き直すだけでいい」「よっしゃあ！」

「話は以上よ。堂崎さん、依頼の結果を楽しみにしてるわ」

そう言つて瑠唯は去つていった。これでまた月ノ森でも活動出来るな。
「おいおい、いつの間にあんな信頼されてるんだよ！」

「八潮さんがあんな簡単に折れるなんて……柊くん、何者？」

「あれが本当のカリスマってやつ……？」

「あはは……特になんて事もなく終わつて良かつたね」

驚きでみんな理解が追いついていないけれど、もう夜になりそうなので帰ることにした。瑠唯の言う依頼。あんな美人に期待されてるんじやはい失敗しました。なんて言えないと。

(今度は自分のためじやなく。たまには人を助けるために才能を使うのもいいじゃないか。よし、依頼開始!)

月ノ森ミッショングループ
もしここが俺の新たな居場所だと言うのなら、ここで理想の青春を過ごすために許嫁の一人ぐらい守つてやろう。

☆♪

倉田さんも、透子もつくしも。みんなと別れて俺と七深の二人だけとなる。

「……七深」

「ん? どーしたの? しゅーくん」

「今日、夕飯の後にアトリエに来て欲しい」

「……うん。わかつた」

俺の声のトーンで真剣だと言うことを察したか、七深は特に深く聞くわけでもなく家に戻った。俺はその七深を見送つてアトリエに帰つた。

「ただいま」

誰かいるわけでもない。心の準備だ。きつとこの話は俺も七深も心の底をえぐる。向き合わなきやいけない現実に隠してた真実をぶつけ合うのだ。でもそれで友達にな

れるか……いや、七深次第だ。

だから俺は……今日。七深を

惚れさせる。

「八潮瑠唯から聞いた。広町七深。かつてはその圧倒的な才能で活躍していたらしいな」

「いやーそんな昔の話るいるが覚えてるなんてなー。でも今は違うよ、普通なんだ」「普通? フリをするのがか? それとも月ノ森ではみんな才能を隠すのが普通なのか?」
『才能があつて気持ち悪い……』

「だつて……才能なんてあつたつて、友達なんて出来ないよ……」

「……ねえ俺達つて同じ絶望を味わつてたと思わない?」

俺たちはいつも一人だつた。近くに人がいなかつたわけじやない。心が孤独だつたのだ。誰も本当の意味では理解してくれない。それなら諦めて普通を演じた方がいい。俺たちはきつと役者の才能もあつたんじやないか。俺の場合は人のだけど。

「でも……私普通じやないし……」

「俺は嫌わない。俺は七深が好きだ」

「すきつ!? で、でも私しゅーくんの知ってる広町じやないんだよ！ 本当は化け物なんだから！」

「お前のどこが化け物なんだ。こんな可愛い化け物がいるかよ」

そう言いつつ俺は徐々に七深に距離を詰めていく。七深は珍しく慌てていて俺から逃げられない。

「あ、ああああああと！ 辛いの！ 好きだし！ 変でしょ！」

「別に変じやない。俺も好きだし」

俺は七深を押し倒した。

「くくくッ!!」

七深は変な声を出して真っ赤になつてている。

「俺がお前と同じになつてやる。二人なら、普通だ」

そう言つて俺は彼女の背中に片手をまわして軽く固定し、七深の手を掴んだ。俺は彼女と同じになつてやれる。俺なら彼女と同じ才能を真似できる。そうだ、もう認めよう。俺は異常な天才だ。

「あつ……」

「嫌なら解いてくれてもいい」

七深は解こうとはしなかつた。それよりもずっと俺の顔を、目を見ていた。俺はずつ

と七深を見ていた。ずっと見てみたかった本当を顔を。

七深の柔らかい手を掴んでいることで、七深の今まで経験や才能を自分自身に取り入れていく……。

自分の中に更なる変化が起ころうとしている……俺は七深の才能と同じ物を自分の中に吸収した。

人の才能でしか輝けない俺は、普通じやない。

「これが普通なの?……男の子つて」

「違う。本当は普通なんかじゃない、普通になりたかつただけだ」

好きな物に憧れて好きになることの何がおかしいのだろうか。誰がそれを馬鹿にで
きるのか。

「はあ……はあ……」

「し、しゅーくん? 大丈夫?」

汗が止まらない。七深に触れていたからか、七深が艶っぽく見えて仕方ない。

「はあ……ああ、新しく得た才能がまだ馴染んでないんだ、本来俺は長期間かけて人を真似する天才らしいんだが……」

日菜め……あの天才にも色々と苦労させられたぜ。

「ね、しゅーくん。一緒に風呂で話そ？」

「え、一緒に風呂?」

アトリエには本家ほどではないが一般家庭用ぐらいの風呂はある。絵具で汚れた時用に作つたのだろうか。俺は毎日そこを利用させてもらつていてるが…………何故今?いや女の子に風呂に誘われるつていつだらうがなんで返せばいいかわからない。まあきっと水着を着てくれるのだらう。

「なんでお互い全裸なんだよ!」

「?しゅーくん、お風呂じやこれが普通なんだよ?」

「ああー!!!前隠せ!見えてる!見ちゃうだろ!タオル持つてこいよ!」

「アトリエには予備のタオルがないよ」

「い、いやでも!お、俺は浴槽に入つてるから!」

「うん」

ちやぽん。

「なんで七深も入つてくるんだよ!?

羞恥心がないの!?七深さんは!?

「ねえ、聞いて私の婚約者さん」

「……？」

「私、私ね。弦巻さんから話を聞いた時、あなたは私と同じ人だつて思つたの。でも本当はそんな事なくて、あなたは私より強くて、もつと凄い人間だつた」

「……親父、か」

「私はそのあなたの生い立ちが好きで、見た目も好きで、中身も好きで。そして天才なんだよ。変えようのない、私達の眞実。堂崎柊くんと仲良くなりたい。そう思つていたら好きになつちゃつた。これつて普通だよね」

「ああ、普通だ。こんな可愛い許嫁がいるなんて理想の青春つてやつだな」

七深が俺のことを知つてたのはやつぱり親父が話していたからだつたのか。全く、段階を飛ばし過ぎだつての。

「あー、それでだな。七深、やっぱり高校生で婚約者なんて普通じやないだろ？」

俺は説得をし始める。八潮瑠唯の依頼と、親父が勝手に組んだ婚約は別物だ。七深。まずは友達から……。

「ううん、これは普通だよ。だつて」

もうこれは本物の恋なのだから。

広町七深は吹っ切れた。そうだ、彼は私の欲しかった全てをくれた。なら私も彼の欲しいもの全てあげようと。そう心に誓つたのであつた。

「身体洗つてあげるね」

「洗わなくていい——！」

「あつ……ビクビクして……」

「してない！」

ギューッと後ろから抱きしめられる。

「あつたかい……あつたかいよしゅーくん」

広町七深は堂崎柊に魅了されてしまつた。

「それはお湯ですっ！」

もう無理です！男として死んでしまいます！

☆♪

風呂から上がつて数時間後、七深に戻れと何度も伝えたのに、俺の布団で寝やがつた。
俺は風にあたるために、外で一人に電話をかける。

「依頼達成、おやすみ」

「ちよつと待つて！いきなり何？……依頼達成？夜よ。ご自慢のアトリエにでも呼んだのかしら」

「そこまで知つてたんなら瑠唯が行けば良かつただろ」

「貴方がいなかつたらそうしたかもしないわね。でも私が行くより貴方が行つた方が早い。そう判断しただけよ」

「あー……そう。悪い、疲れてるから詳しい話はまた今度でいいか？」

「わかった。お疲れ様、終くん」

仕方ないので七深と一緒に寝ることにした。とてもいい匂いがしたのは俺だけの秘密にさせてくれ。

幕間 むかしのおともだち

昔、私は音楽が好きだった。好きなバイオリン。好きだけど少し変な男の子。好きな人とやる好きなバイオリンは私の人生で最も幸福な時間だつただろう。でもそれは遠い遠い昔。

そう、そうだつた。あの日もこんな弱い雨が降つていた。どうせなら雷でも落ちてくれれば良かつたのに、私の気持ちを表すから……なんて柄にもなく感情を荒げた。悲しい気持ちになるのは久しぶりかもしれない。

私は、父に弦巻終を撃たせた。

あの時の心の痛みは今でも覚えている。



この広い舞台の袖にただ一人でバイオリンを抱え、座っている金色の少年がいた。一般人には到底理解できないがここはただの音楽コンクールの舞台だ。

富裕層の人間達は我が子に才能を身につけようとさせた。音楽なんかその大人のお遊びにはうつてつけだつた。こんなことで優劣つけずに楽しくやればいいのに。と幼い頃の堂崎終こと弦巻終は思つていた。

そこにパーティでよく見る令嬢が挨拶に来た。知り合い以上、友達未満。正直こういう人達って苦手だ。自分を保つために巻き込まないでほしい。形だけの挨拶なんて面倒なだけだ。

「今回も互いに楽しみましょう？弦巻さん」

「……ええ。少ないバイオリン奏者ですが良い音を奏でたいです」

「はい、それでは私はここで。ごきげんよう」

たつたそれだけか。そう思われて仕方ないが、挨拶をした結果だけが必要なのだ。あいう生きるのが上手い人間は顔を覚えてもらうことを知つている。そんな人間に興味はない。特に今日は集中しなくてはならないのだ。

（おじい様が見に来られるから……失敗出来ない）

と心を落ち着かせ、はあ。とため息をついた。近くにあつた箱に座つたが座り心地が良くない。すると突然横から美少女、いや美人？ 多分俺より若いはずなのにキリツとした顔つきをしている。だが子どもである、大人には見えない。また挨拶か、と俺は憂鬱な気分になつた。

「せつかくの舞台なのに、楽しそうじゃないのね」

思つたのと違う言葉を投げられた俺は、無意識に顔を上げた。その細い目で見下ろされていたら、威圧感すら与えるだろう。

「ほつといてくれ。君には関係ないだろう」

「今回のバイオリン、貴方と私だけね」

「話を聞いているのか？」

その女は俺の意思関係なく、話を進める。ああ、助けてくれ。巻き込みたくないんだ。「単純に気になつたの。私と同じバイオリニストで男の子、それなのにちつとも笑わない。緊張しているのかと思ったのだけど、そうじやない」

まだ純粹無垢な少年は金色の輝きを表現出来ず、弦巻終はこの不安を隠しきれずにいた。

「ふーん、それで？ 名前も知らないお嬢様に勝手にある事ない事言われて迷惑なんだだけ

ど

不良貴族？いやイライラしているだけだ。図星。関わらないでくれ。

「バイオリンは好き？」

「一体何なんだ。いずれにせよ、きっと俺はこの黒髪の女に勝てない。わかるんだ、だからこそ腹が立つ。

「バイオリンは……やつてみたけど上手くない。でも嫌いじゃない」

表情変えることのないバイオリニストはその後も俺を見ていた。母親が息子を心配してみたいでなんかムカつく。そんなこと言つたら失礼か。当時、年の近い友人は初めてだつたかもしれない。共通の趣味、バイオリンもあるし、何より交友関係は全ておじい様に止められていた。

「貴方のこと、もつと教えて」

次第に俺は本当は心に留めておこうと思っていた些細な事も打ち明ける様になつた。彼女は話をするのは上手くないが、聞くのは上手だつた。最初の態度も謝つた。少しだけ、バイオリンのコツも教えてくれた。少年だつた俺はどんな事でも他者の交流がとても嬉しかつた。

コンクールは順調に進んでいった。結果から言うと俺は8位だつた。このたくさん

の出場者達を考えると自分にしては好成績ではないだろうか。これも八潮瑠唯のおかげだろう！

そして全ての項目が終わり、俺は最初とは比べ物にならない喜びを感じていた。今すぐあいつと話したい！伝えるんだ、ありがとうって。



演奏が終わると共に、一息つき。私は舞台を降りる。すると前から弦巻終が楽しそうにしていた。傷だらけの少年は、初めて自分の足で立つ事を覚えた人の様に走つて向かってきた。

「いた、瑠唯、見たぞ！名前も確認した！お前3位つて凄いな！」

「……どうして名前呼び？」

「え？いや……名前があるんだから名前で呼ぶのが普通だろ？」

「……貴方の中ではそれが普通なのね」

八潮瑠唯は段々と弦巻終について理解してきた。対人経験の少ない純粋な少年。それが今の瑠唯の終の感想だ。初対面の時は見るからに暗そうで、幼くも世間を恨んでい

るような全ての終わりかの如く濁つた目をしていた。

「なあなあ！それより俺にもバイオリン教えてくれよお～～なあ、頼むよお～」

「……そのテンションは鬱陶しい」

浮かない顔をしてなんだか放つてはおけないから。そんな理由で話しけてはみたものの、失敗だつたかもしね。でも……

「なんだよ～さつきは絡んできた癖にい～～とそんなことより、この後二人でバイオリンを弾こうよ。奏でてみたいんだ！こんな気持ち初めてで！」

「……そうね。私も一度やつてみたかったのよ。二重奏」

何故だろう。自分も凄く楽しくなつていた。ボロボロの彼の可能性か、それとも私自身の変化の期待なのか……。まだわからない。

「フフツ……」

「お、笑つたな。やつと笑つてくれたな。可愛い笑顔」

「からかわないで」

瑠唯は基本表情を変えないから怒つてるよう見えるぞ。せつかくの美人が台無しだ。キリッとした瑠唯も好きだけど、笑つた瑠唯の方が何倍も好きだな」

そう自信満々に言葉を繋ぐ彼だけど、それは友人にかける言葉ではないわね。

「貴方、ナンパ師の才能があるわよ」

「ええっ!?」

表情をころころと変える弦巻終を見ていると、先程の暗い彼とは別の人物と話している気分だつた。

「自覚はないの?」

「うぐつ……生憎、まともに話せる友達がいなかつたもんで」

お世辞にも上手いとは言えないバイオリンに、特別気品があるわけでもない。それでも私は彼から学べる物があると考えて いる。私の前に挨拶に来ていた少女。彼女もきっと彼の本当の力を感じたのだろう。まるで人に好かれる天才ね。

そう思いながら私達は私達だけの演奏をし続けるのだった。

（☆）

あれから私達は私の家……つまり八潮家で来る日も来る日もバイオリンを演奏した。私が弾いて彼が聞く。私が聞いて彼が弾く。プロの演奏者の演奏を聞きに行つたり

もした。夜遅くなつたら一緒に同じ夕飯を食べ、一緒の部屋で寝ることだつてあつた。
子どもの頃の話。

あんまり彼がはしゃぐものだから、私まで怒られそうになつたりした。正直、彼の調子に乗る癖は世間知らずが生んだ性格なんかじやなくて、ただ単に目新しい物に喜び、興奮する子どもらしさ。であつた。

そんな日々が3ヶ月ぐらい続いた頃、その日は黒い雨雲が空を隠した。まるで土砂降りの日の空みたいだつた。

私は窓から外を見上げていた。はあ……とため息をつきながら長いカーテンを閉める。今日は先程の話を聞いてから気分が憂鬱だ。弦巻終はそれでも自分のための研究をやめない。

「帰らなくていいの？」

と私が聞く。すると彼は悲しそうな顔をした。

「いいんだ、どうせあんな家、俺は愛されていないんだから」

と寂しそうに呟いた。

今になつて考へると、彼も逃げ出したかつたんだろうと考察出来る物言い。

「そんなことよりさ、曲作つてみたいんだ！俺だけだと頼んでも家族はうるさいし、才能ないから無理だつたけど、瑠唯がいるなら出来る！」

「作曲なんてした事ないわ」

「俺たち二人ともバイオリンやつてるんだし、バイオリンの曲なら出来そうだけどなあ」

「簡単に言うわね」

「やつてみなくちやなあ……とりあえず機械をセットしてみる」

そうして終は瑠唯に背を向けた。

私は彼に照準を定める。心がざわつく、心臓が破裂しそう。コンクールでもこんなに緊張しないのに。ああ、私。本当はもつと貴方を愛したかったのだ。子どもだったからバイオリンじや伝えられなくて私はその感情を憎悪と勘違いしていた。弦巻終を嫌いだつたんじやない。好きだつたんだ。他の誰にもないその純粹さで私を邪魔しないで。私の父は貴方の事が嫌いだつたのよ……。

私は――――――引き金を――――――。

「……ッ！」

八潮瑠唯は引かなかつた。気絶するだけとわかつていても、幼き少女が夜を共にした友人を撃つなんて出来るわけがなかつたのだ。いや誰にも出来ないだろう。張り裂けそうな心を一体誰に伝えればいいのか。何が正解なのか。お嬢様とはいえ、人間なのだ。完璧な人間なんていないのだ。

「……から、ここは瑠唯に頼みたい。瑠唯？ 瑠唯、おい聞いているのか？」

「え、ええ……」

私はずっと一人だつた。

「そつか、聞いてるならいい」

それは比喩で実際には心が、だ。

「終！」

彼も同じできつと巻き込まれただけだ。

「絶対、いい曲を作りましよう」

どうかこの時間を奪わないで。

「ああ、もちろん！」

私はその小さくも禍々しく、諍いの元であるコレをしまつた。
初めて神に願い事をしたかもしけない。

〈時は少し戻り、終が来る前〉

とある老人の男性が、一人の召使いを連れ、八潮邸に入つていつた。高級車から降り、傘をさして貰つて門を抜けて中へと。

「邪魔するぞ。八潮、相^{そう}変わらず殺風景な家だな」
「来て早々文句ですか？創一さん」

実際、八潮邸の中はクソがつく程眞面目な瑠唯の父親が、これが私の人生だ。とも言わんばかりの部屋だった。よくいる調子乗つた金持ちが持つてゐるような悪趣味な家具や装飾品などは一切置いておらず、それでいて氣品のある家だ。

それでも弦巻ほどの家となると、ここですら殺風景になつてしまふらしい。創一の価値観の問題でもあるのだが。

「それで今日はどうしたんですか。まさか用事もなく会いにきた、なんて事はありません

んよね?」

「ハツ…………くだらんわ。次からはもつとユーモアのあるギャグを考えておけ」

「はあ……」

「お前の娘の瑠唯ちゃん……だつたか、相変わらず才能の塊じやのう……ウチに預けるつてのはどうかな?」

弦巻家では弦巻終の祖父、弦巻創一(つるまきそういち)の趣味の一環としてあらゆる分野の才能を育てあげている。この話を断る一般人はいない。何故なら弦巻というブランド力で弦巻家と関係を持つておきたいから……本当に才能を開花させたいから……とまあ断る理由のないメリットだらけの話だ。しかしどこく稀にいるのだ。その珍しい者が。

「(二)冗談を。確かに私も瑠唯のステップアップには興味はありますが、弦巻家には預けられないですよ」

「ふむ……まあいい。才能を育てるにしても仕事にしても嫌々、というのは無意味だからなあ。そう言われることも覚悟していた。ならば……」

不適な笑みを浮かべながら懷から出したのは拳銃だった。いや、拳銃に似た何かだ。影から見ていた瑠唯は思わず飛び出してしまった。

「いたのか、瑠唯ちゃん。君に頼みたい事があるんだが……」

その後、瑠唯は父と一緒に話を聞いた。この拳銃のような物は殺傷能力はないが、気絶させるぐらいなら容易い物……らしい。これで私に終を撃つてほしい、と。

何故そんなことするのか私は理解が出来なかつた。

その話の途中、召使いの方が警告を出していた。

「で、でもこの銃は本来、動物の実験用に使われる物です。こちらを人間でやるなんて、人格や記憶がどうなるかわかりませんよ！」

「構わない、やれ」

父と私は驚いていた。この人が結果や才能を重視して、それ以外簡単に切り捨てる人間だとは知っていた。父にそういう人間だと教わつてたからだ。でも私が驚いたのはそこじやない。一瞬でも躊躇わざに自分の孫を撃たせることに恐怖を感じたのだ。

私はソレを渡した後、弦巻創一は父に何かを話していたが声が小さく聞こえなかつた。

「なあ八潮…………の…………だろう？」

「え？いや…………それは…………した」

父の答えはYESだつた。そうなつたらもう私は従うしかなかつた。それが私だつ

た。まるでロボットみたいに命令を聞く機械……。

今日、私は彼を撃つ。感情を捨てろ。それしかない。

私が決心をしている間に、創一達は帰つていった。後味の悪い言葉だけ残していく……。

♪☆♪

私は決めた。自分に従つて撃たない。決断した。

あれから数時間、初めての作曲に試行錯誤を重ねていた。流れる雨の音すらも作業のお供として活用した。

「よしつ！ 完成！」

「中々いいメロディーね」

「ああ、後は誰かに頼んで編曲すれば将来売り上げN.O. 1間違いなし！」

「誰がそんな事出来るの？ 天才ぐらいしかいないでしよう」

「なら天才に頼めばいいだろう」

「子どもね……」

作曲だつてほとんど私がしたようなものだけど、退屈しなかつた。

これが満足感という物だろう。瑠唯は先程の話などすっかり忘れて楽しんでいた。
そう、これでいい。これが正解。だつたはずなのに……

バーン!!!

気づいたら……いつの間にか……銃声がした。

弦巻終は頭から血を流し倒れていた。空気が変わり音が鳴り響いた。

「…………え？」

目の前の光景に、もう正直作曲だと、バイオリンだと今はどうでもよかつた。ただ目の前で倒れている友人が非現実的すぎて理解も感情も追いつかなかつた。

こんなの求めていなかつた。ああ、夢なんだ。きつとこれは……。

「瑠唯……すまない」

父のその声で無理やり現実に引き戻される。嫌でも苦く、苦しい味が胸を締め付け
る。愛されていないとはこういうことなのか。安心できる自由がないとはこの事な
か。

「言つたじやない…………。あのヒト達……」

「瑠唯の未来のためなんだ……」

未来？友達を捨てる事が未来に繋がるというの？弦巻家ではそう教えているの？何
を脅されて怯えているの？次々と浮かんでくる疑問を前にして、私は彼に駆け寄り身体
を起こしてあげる。

金色の髪色とそこから伝わる赤い血はまるで一つの絵画のようであつた。その終を
持ち上げ、悲しき顔と涙を浮かべる少女は一体何を思うのか。

「殺傷能力はないって言つたじやない!!!」

「…………」

「ねえ！誰か答えてよ……私…………」

こんな理不尽な事があつていいのか。こんなにも戦っている少年がいるのに、私は何
もできない。それ所か、父が全てだと思い込み、彼をまた才能だとか大人の都合に巻き
込もうとした。子どものわがままも聞いてもらえないのに。

「病院へ連れて行こう……瑠唯。一度彼から離れるんだ。彼は……終くんは普通の子じゃない」

「……とりあえず、彼を治して」

「あ、ああ」

連れて行かれる彼を見ながら心に穴が空いた気持ちになつた瑠唯は、ただ一人決意を固めた。

そうだ……変わろう。数年後もし彼に会えるとしたら。そうしたら私は優秀な人間になつて弦巻終の助けになろう。もし未来があるなら、私は自分自身で作つてやる。

土砂降りの日だつたソノ日からは私はあまり笑わなくなつた。彼とまた笑顔を分かち合うまで。そう誓つたのだ。

それから数年。私は音楽を捨てた。

もうバイオリンは出来ない……彼がいないのに私は……私だけ弾くことなんて出来ない。

「はあ……ダメね。私」

「十五歳となつた八潮瑠唯は昔と比べて、全てにおいて見違えるような人間となつた。
 「未来どころか過去に引つ張られたままなんて……それは終も同じかしら。いや、終
 ……だつたわ」

あの容姿端麗、文武両道とも言われる八潮瑠唯でもとんでもない人生を体験している
 男の子についてはつい独り言が多くなつてしまふようだ。

「次はいつ2人で弾けるのか楽しみね」

部屋に飾られたバイオリンを見て、懐かしみながら今日も制服を着るのだつた。

「??？」

「ここは……」

ココを意識した時、時間や自分の知る世界の概念など無いに等しかつた。それぐらい
 ココは特別な場所で自分の居場所だと感覚で悟つた。

暗い夜空に綺麗な星々、それを隠してしまうオーロラ。羽の模様すら見えないがたくさん
 飛び交う水色の蝶。そしてこちら一帯を覆い尽くす青い花。その花の中で俺は意
 識を失つて倒れていた。

そしてココを自分にとつて大切な場所であるということにそう時間はからなかつ
 た。

(また、俺は夢の中にいるのか……)

白昼夢ならまだしも、ここはなんだか妙に落ち着く。そしてその事実が逆に怖い。

何故だろう。月ノ森に来て会つたばかりの広町七深と八潮瑠唯には何処かで会つた気がするのだ……。これは予感なのか、それとも……。

なんだかボーッとするし、視界はグラつく。耳鳴りはするし、火薬みたいな臭いがするぞ……。

「やあ。元氣かい？問題はない？調子はどう？」

なんだこいつ。急に目の前に倉田さんっぽい人が来たぞ。凄い見た目だかそつくりな人。いつからいた？どうやつて出た……。疑問を考えるだけ無駄そうだ。

「誰だ？倉田さんのモノマネ芸人か何か？」

「うーん！残念！違いますっ！もう私がこういう性格なので、誰か言っちゃうと、君が撃たれて人格と記憶が亀裂を生み、崩壊しけ、混ざり合つてそこから生まれた君の、君自身の憧れ、そして希望だよ」

「あー……つまり倉田さんのモノマネ芸人？」
「違うって言つてんでしょ！！」

撃たれた？憧れや希望？病院で診てもらつたらどうですかと言いそうになつたが、本人は至つて真剣なので無自覚タイプの人かもしけない。

「それでなんでここには透明な蝶がたくさん舞つてるんだ？なんかのイベント？」
「だってここ現実じやないから」

「は？」

何を言つているんだコイツは。というか俺はいつからこんなファニーな子とお知り合いになつたというのだ。というか人に言われて自覚したくない。

「ここ現実じやないの。アナタの過去とか記憶の混ざつた夢っぽいアレ」

「……はい？」

「いや本当なんだつて！信じられないかもしぬないけど！信じられないような人生送つてるアナタなら対応できるでしょーが!!!」

少し考え込む仕草をした後、俺はふうとため息をついた。

「……倉田さん、キヤラ変わつたね」

「だからあ!!!!この変態無能馬鹿!!!いつまで寝ぼけて現実見ないフリしてんのよ！これが現実なの！幻想じやなくて！」

「……わかつてるよ」

そんなこと、言われなくとも。

視線を彼女から逸らすと、彼女は声を低く真剣なトーンで話し始めた。

「あのねえ、柊。君には今から彼女達の記憶を追つてもうから」

「追う？ 記憶をか。彼女達って誰のことを指しているんだ」

「まあ今説明するよりも実際に見てもらつた方が早いかな。ほら、ついてきて」

そう言い残し、ココに現れた一人の少女はガンガン進み、俺を置いていく。

「……くだらなかつたら寝るぞ」

俺は急いで立ち上がり草を踏みながら後についていった。

♪♪☆♪

ピーピーと心電図の音で目が覚めた。最初に目に入ったのは白い天井。どうやら病院にいるらしい。

「ん……」

身体を起こすと頭痛。そして少しダルい。

「瑠唯……」

俺はつい最近の記憶を掘り返す。友達……それどころか別の感情すらも抱きかけていた少女を思い出す。

「あ……だから普通になりたいんだよ」

十中八九。家の都合なんだろう。彼女には申し訳ないことをした。

かなり状況は違えど、一緒に居たくてもいれないなんてまるでロミオとジュリエットみたいだなど重い心で想像していた。

「……なんだか気分が変だ。別人に意識だけ自分が乗り移つたような……？そんな感覚」

先程から手のひらを何度も開いたり閉じたり、足を動かしたりと自分の身体を試す動きをしていた。

正確には自分にもう一つの人格が生まれそう……。そちらの方が正しいのだが、幼い頃の自分が気付くはずもない。

「さて……」

周りを見回す。本当はナースコールで看護師でも呼ぶべきなのだが、終にはどうして

もやりたいことがあつた。

「瑠唯に、何かしてあげたいな……」

迷惑をかけたんだ。最後にさようならも言えなかつたんだ。

何かしてあげたいんだ。

「なんかあるかな……あつ……今時こんな小さなおもちゃがあるんだなあ」

俺が手に取つたのは猫?のようない形のバツチだつた。

(……これを少し加工出来れば良さそうな物が出来そうだ)

「ここはただの病室。店のような品物には出来ない。出来る事には限りがある。

「このままバツチ……にはつまらないし、ネットクレス……は素材がないな。どうするか

……」

起きかけの頭で少ない知識から正しいと思う答えを捻り出す。

(髪留め、なんていいかもしない。瑠唯はあんまりオシャレしないからな)

と考え事をしていたらパワー有り余る子供の力で病室の扉が開かれた。

「お兄様ッ!!」

扉が開いたと思つたら今度は思いつきり抱きしめられた。俺にはこころを抱きしめる資格がなかつた。

「こ、こころ?」

見覚えのある金色の髪の毛に知つてゐる匂い。その少女は紛れもなく自分の妹だった。

「どうしてここに?」

「お父様が教えてくれたの! 怪我して病院にいるつて! 大丈夫なの?」

あー……成る程、我が父は教えないで心配をかけるよりも自分の居場所を教えて安心させたみたいだ。だがこの行動力の塊みたいな奴に教えたらこうなるだろうとは俺でも想像出来る。

「……まあなんとかね……。こころお前こそ大丈夫だつたか?」

「なんのはなし?」

本当にわからないみたいだが……。今までにお爺様に逆らつたとしても病院送りにされる程の事はなかつた。……もう俺だけの問題じやない。俺に関わつたらみんな不幸になる。身内にまで迷惑はかけられない。

「こころ。お前はいつも楽しいことをして俺を笑顔にしてくれるがもう俺を巻き込むな。迷惑なんだよ」

「お、お兄様……?」

「ほら、もう帰つて……」

「い、いや……」

「帰れ!!」

俺のこころに言つた事のない強い言葉に一瞬、寂しそうな顔をしたこころだが、今度は何かを決め込んだかのような表情をした。

「あたし……お兄様が笑顔になれるように、頑張るわ!!!」

「……はあ?」

「絶対、ぜえ〜〜つた! 笑わせてみせるわ!!! 待つてて! お兄様!!!」

そのまま猛スピードでこころはどこかへ行つてしまつた。

大丈夫なんだろうか……。

(なんというか……感情の処理が上手い奴だな……本当)

ひと騒ぎあつたものの、俺は小物作りを続けた。すると10分ぐらい経つた頃だらうか、いよいよの視線を感じた。またこころが戻つてきたのか?とも思ったのだが、それにしてはやけに静かであるで水族館の魚を見るかのような静けさだった。

「誰だ!?」

「え、あれ……バレちゃつた?」

出てきたのは……知らない女の子だつた。怯えているわけでもなく、ただ俺に興味が

あるからいた。観察していた。といつた感じであった。

「あ、ああ君ね、隣の病室の鈴木さんね」

「本当にわかつてる？？」

（え、カツコつけて誰だと言つたけどマジで誰なのこの子……！？）
「ずっと見てたのか……？」

「うん、お父さんが絵を描いてたら怪我しちやつて、今日たまたま病院に来たんだけど、そしたら凄い勢いで走つていく女の子がこの部屋に入つていつたから気になつちやつて」

「……なるほど」

「こころめ。病院では走つちやいけませんというのに……。それで最初から見ていた」というわけか。

「ところでそれ、何作つてるの？」

少女が興味を示したのは俺が即興で作つた髪飾りだつた。

「ああ、これが。俺の最高傑作さ。可愛いだろ？」

「うん、とつても可愛い熊さん」

「猫だよ!!!」

「あれ？」

すごく自分興味あります！といつた目で見て いる少女。うーん。作つてはみたけど瑠唯には少し可愛いすぎるか……？渡していらっしゃって言われても困るしなあ……。

「欲しい？髪留めだけど」

「え？いいの!?」

「こんなの、店で買うものより安っちはけど。まあいわゆるおまけ集めってやつだな」「おまけ集め？つてあのハッピーセットみたいなやつ？」

「そうそう。案外ああいうのでもコンプリートすると達成感あるぜ」

「そつかあ……そなんだ……えへへ、ありがとう！」

少女は早速、その桃色の髪の毛に猫の髪留めをつけた。そんなに嬉しそうだと照れるな……。

「その……なんだ。大事にしてくれると嬉しい」

「うん！大事にするね！」

二コニコとした名前も知らない少女は高級でもなんでもないガラクタを喜んで身に付けた。まだベッドから動いていない少年は心に少し希望を取り戻した気がした……。

「ほら、早く行けよ。俺なんかに構つてないでさ

「……また、会えるよね？」

「さあな。君がその髪留めをつけていたらわかるかもな」

「そうだよね！いつか君のこと絶対巻き込んであげるから！幸せに！」
「あ、ああ……」

（変な奴だな……初対面の俺に。普通じゃない子だ……それにまた会うなんてそんな運命的な出会い。あるわけがない）

俺が困惑していると、遠くから女性の声が響く。そして看護師が焦った顔して入つてきた

「な……ち……ん？おー、いたいた、探しましたよ。お父様がお呼びですよ、広町七深ちゃん」

普通じやない日常 そう遠くない未来

それは突然現れてはごく普通の日常のように俺の前へ降りかかって來た。俺は壊れたのか？それとも夢？幻影？考えたつて結果は分からぬ。答えは出ないから。ただ一つ、俺はまた面倒なヤツらに巻き込まれたという事実だけは残る。

「お父さん！」

白髪の子

「お父様！」

若干紫色の髪の子

「パパ！」

金色の髪の子

「おとーさん！」

桃色の髪の子

「父上」

黒色の髪の子

あり得ない。何故俺が同年代の女の子に父と呼ばれなきやならないんだ。

「……え？ 俺？」

時刻は昼頃。昼食を外で済ませてアトリエに帰ってきたのだがMorfonicaはまだ帰ってきていないのかそれとも遊びに出かけているのか。誰一人もいなかつた。

(ま、休日だし、女の子同士で買い物とかあるだろ)

「さあて二度寝しよーかかなあ！」

「ねー聞いてるの？お父さん」

勘弁してくれ、まだ俺は10代だ。新手の詐欺なのか。だがあまりにも似過ぎていい。一番彼女達の事を見てきた俺がそつくりでもない、かと言つて本物でもない。紛れもない娘なんだと理解してしまつた。

「聞いてお父さん！私達お母さんみたいにバンド組んでるんだよ！」

「そうかそうか、君たちのお母さんは頑張つて五人も育てたんだね」

「何を言つているんですか？私達のお母様は全員違いますよ！しつかりしてくださいお

父様！」

君たちのせいでしつかりできないよ。いきなり娘という子がきて母親が違う？ 正気を疑うが武士級の寛容さと天才級の器用さでなんとか対応する。つまり俺とMorf onicaの子供で父親は同じ俺だけど、母親は全員別！？

「人違いいしていない？ そもそも俺君たちの事知らないし」

「あはは！ パパカツコいいけど、ママが言つてたようにアホなところがあるんだね！ そんなどこもスキ！」

「ありがとう、早く帰った方がいいぞ。てか早く帰れ」

「おとーさんはお風呂に入るのが好きって聞いたよー。私もおかーさんとおとーさんとよく入つたけど、なんで前屈みになつてたんだろーねー」

「さあ、なんでだろー」

「父上。父上はスタイルの良い女性が好みだと知つております。それは私が一番の娘だと言つても過言ではないですね」

「仮、君は未来を信じてるか」

この個性的な物言いや性格は俺の知つてゐる女の子達の娘だと言うことがわかつた。なのになぜ五人が五人とも俺を父と呼ぶのかオレニハサツパリワカリマセン。

「仮にだ。仮にお前ら五人が俺の娘だとしてだ、なんで俺らの時代に来たんだ」「それは…………お父さんが35股する未来を防ぐためです！」

「え、何？ごめんちょっとよく聞こえない」

「ごめんねましろ娘。お父さんには35股とか聞こえたんだ。耳鼻科行つてくるからその間に帰つてね。

「全てを乗り切つたおとーさんがこんなにも魅力的な男の人だつたらみんな好きになつちやうよ……娘も」

「ごめん意味がわからない」

「気にしなくともいいって！パパはあたし達が守るしさ…………ママ以外の女から「そんなにも俺の未来はヤバいのか……いや既にこの現在がヤバいんだけどさ」

「大丈夫！私に頼つてくれれば完璧に解決しちゃうんだから！」

「それはありがたいな。頼りにするから全部解決してくれ」

「？娘としては当然の事よ」

「君は瑠唯の娘つてすぐわかるね」

そもそも俺は女の子の友人どころか知り合いすらも35人もいないと言うのに、未来の俺は手当たり次第に恋愛アプリでもやっているというのか。

しかもこの五人、母親の遺伝子を受け継ぎすぎだろ。何なら俺の要素いらなくないか。

「大体、30人とかそんなに浮氣するぐらいなら私達と浮氣すれば良かつたんだよ!!」

ましろさあああん!? あなたの娘は大分自信がありますね!! 月ノ森とか部活掛け持ちするぐらい自信アリアリじやないですか!?

「ちょっと待て、何を言つてる。それ俺ヤバいやつだから、洒落にならないやつだから！」

「ソレだ！ 白いのいい事言うじやん！ 将来はモテる女として流行るよ〜〜」

「ソレだ！ ジヤねえんだよ！」

「大丈夫だつて！ あたしの言つた流行るは絶対流行るし！」

「確かに、おとーさんが流行るつて言つてから35股したもんね！」

おおう……、かわいそうな透子……お前のハマつてたものは絶対流行らなかつたのに娘はちゃんと流行をしつかり理解してるようだぞ……。そんな透子が好きだけど。

「今さり気なく女の子に好きつて思つたでしょ」

「なんでわかつた七深娘よ、エスペーか心を読めるの?」

「だつて私天才ですしふ」

親の悩みを一瞬で蹴るなよ。俺と七深の今まででは何だつたんだ。謝つて差し上げろ。人の心を読めるのは最早、人間の域を越えている。

「天才と天才の子供だよ？ そんなの完璧に決まってるじゃんー！ しかもおとーさん専用のテレパシー持ち！」

普通より完璧さを求める七深の娘。そのうち空も飛べるのではないだろうか。一体君は何を目指しているんだ。

「ちょっと待つて！ 堂崎の名前を貰っている以上、高貴で優秀ながらも傲慢したり慢心してはいけないわ！」

さすがつくしの娘。心なしか母親より頼もしいのはつくしの教育が良かつたんだな。……そういうことにしておこう。

「そうだ！ いいぞ！ つくしの娘！ この暴走娘どもに言つてやれ！」

「お父様は節操無しのクズなんだから私が朝から夜まで起きてから死ぬまで面倒見ないとダメなんだから……ダメなんだから……お母様としてるみたいにキスして動けなくさせなきや……ダメなんだから」

「期待した俺がバカだつたーーー！！ つくしーーー！ お前何やつてんだーーーボケーーー！！！」

「そんなことより父上、私とゲームしましようよ！」

「げ、ゲーム？」

マイペースな瑠唯の娘。この状況を開拓してくれるのは瑠唯のような冷静さしかない！俺じゃ無理だ！頼む！

「母上はそんなのよりも才能ある事をしなさいと言うのだけれど、父上が『良いだろ？ 瑠唯』と言つてくれるとすぐ才てるの！」

「あ、ダメだわこの娘」

瑠唯工……せめて娘には威厳を保つてほしかったよ。瑠唯の娘は母と違つて才能あるとか気にしないで自由奔放な部分があるみたいだ。俺のせい？

鏡で映したかの様に正反対な彼女達は俺では全く対応出来ない。それでも変わらないのはその信念と俺への愛か。反抗期は嫌だけどこれはこれでお父さん困ります！

「お父さん！私とランデヴーしましようよ！お母さんは下手でも私なら！」

「パパ！あたしが絶対気持ちよくさせてあげるから！パパに合ったイケてる女の子が好みだし！」

「おとーさんは天才なんだから、もちろん天才と一緒にになりたいよね？」

「お父様！わ、私！胸は小さいけれどお父様を思う気持ちは負けません！」

「……お腹すいたわ」

「ましろー！透子ー！七深ー！つくしー！瑠唯ー！誰でも良いから助けてくれー！！！」
「〔〔逃げないでー！お父さん！（パパー）（おとーさんー）（お父様ー！）〕〕

「あ、これ美味しい」

「勘弁してくれええええええええ!!!!!!」

M o r f o n i c a は娘すらも俺を巻き込むらしい。ならば俺も巻き込んでやろう
と謎の決心をした1日だった。

そう遠くない未来に、幸せはあるのだろうか。答えは自分で見つけてみせる。可愛い
娘達を見て俺は尚更そう思つた。

＼＼＼＼＼＼＼＼

「……あ、起きたよ柊君。おはよう」

「あ、あれ？ましろ。お…はよう」

目が覚めたらましろの美しい顔があつた。目が覚めた？今のリアルすぎる現実でか

?

「もうーしゅうが寝てたら練習できないじゃん！この寝坊助！」

「透子……」

「ここで寝るお昼寝は気持ちいいよねー」

「七深……」

「寝不足はあまり関心しないわね」

そこにはいつもの様に椅子に座っているMorfonicaのメンバーがいた。

机の上に都内のショッピングモールの袋がある辺りやはり買い物に行っていたらしい。

「瑠唯に……つくしは？」

「いるよ~」

奥でドラムをいじっていた。

柊は困惑していたのだ。え、夢オチ？ともし夢だとしたら自分はどんな性的な欲望を持つているんだって話になる。

「う、あれ？娘は？」

思わず尋ねてしまつた。無意識に口が開いたのだ。

「えええっ～～～!!?」

「え?! 桜くんに娘いたの!?!?」

「娘だつて?」

「貴方……寝ぼけているの?」

「娘つて誰と誰の……?」

「いや……俺とお前たちの」

その日誰も俺と顔を合わせてはくれませんでした。ましろには目が合うたびに恥ずかしがられ、つくしには「不潔!!」と嫌われてしまつたようだ。透子にはセクハラだー!と騒がれるし、七深には「じゃあ今日ゆつくりね」と意味わからない事を言われた。

瑠唯には汚らしいモノを見る目で軽蔑されているつ!?

俺は夢だとかそんなことはすっかり忘れて、娘達は俺の妄想と思うことにした。あんなに嫌われていたら子供なんか出来るわけないしな!!!

なんだ。安心してM o r f o n i c aと過ごしていけそうだ。